始

325-505

國立臺灣圖書館藏

華魂

青木白風 著

正
6.14
內交

序

信仰のない生活ほど不安なものはない。信仰は人間生活の根本の力である。從てその信仰は正醇な信仰でなければならぬ。法華經の信仰、日蓮主義の信仰は正に吾等の憑るべき人世行路の指南である。絶對の力である。

青木君のこの書は、古來日蓮主義の信仰に生きた人々の中で、代表的人物十數人を撰んで、小說的にその生活を描いたものである。その內容には悲壯なる殉教者の歷史もあれば、平和なる法悅生活

の描寫もあつて、謂はゞ實生活に現れたる日蓮主義の反映である。之を日蓮主義の人格的象徴と云つても可ければ、法華經の色讀體驗と云つても可い。法華經の眞髄、日蓮主義の精華は實に斯の如く美はしく、又力つよい心靈上の華として咲いたのである。いま此等先蹤の迹を尋ねて、今さらに信仰の力の偉大なるに驚くものがある。此書の如きは心靈上に荒んだ今の世に信仰生活の龜鑑として大に寄與する所あるを疑はぬ。

大正六年五月

法學博士　山田三良識

序

宗教の生命は信仰である。信仰なき人の宗教的活動は譬へば操人形の踊り廻るが如く、いかに巧妙細緻を極るも畢竟土塊木片に過ぎぬ。

青木氏の新著法華魂は日蓮聖人以下信仰生活の典型とも見るべき人々の事蹟を平易に印象的に書いたもので、活ける法華經卽ち人格化したる日蓮主義の歴史である。由來正しき信仰を得たものには精神的動搖がない。いかなる境遇、如何なる運命に支配されても、苦をば苦と悟るの餘裕があ

り、樂をば樂と開くの覺悟がある。此書に載する所みな其の殷鑑として、信仰の威力を事實に依て鼓吹するものである。

今や日蓮主義の勃興の際此好著を得たるは獨り同主義者の喜ぶ處なるのみならず予は此書の世人を啓誘して信仰に入らしむるの力決して尠からざるを信ずるのである。

大正六年五月　海軍中將　佐藤鐵太郎識

序

佛法を學せん法は必ず先づ時をならふべしと、日蓮上人は教へられた。今は如何なる時であるか。今は實に吾が日本國に取つて最も大切なる時である。日本國民の精神上に大革新を要する時である。西洋文明を模倣した時代は已に去つて、今日は自己の力によつて立つべき時となつて居る。眼前の問題を解決すべき必要があるのみならず、百年の大計を立てなければならぬ時となつて居る。斯る時代の要求に應ずべき剛健眞摯なる人物は正

しい信仰の中から養ひ成されなければならぬ。正しく法華經の流布しなければならぬ時が來たのである。日蓮上人の教へられたことが正しく理解せられ、また正しく實行せらるべき時が來たのである。

斯る機運に應ずべく、上人の教義若くは人格を闡明し描寫することに力を用ゆる人が近來少からぬやうである。併し上人の仰せられた如く、受くるは易く持つは難い。正しい信仰を持ち續けることが出來なければ、いかに日蓮主義研究の聲ばかり高くても、實際世の中に益を與へることは望まれぬ。されば不惜身命の決心を以て此の正しい信仰を持ち續けた人の事蹟を世間に傳へることが、今日に於て殊に必要なる業である。本書の著者壽木君と、余は十四年來の友である。而して余は常に青木君の人物と才幹とに感服して居る者である。余が今日に於て殊に必要と感ずる業が、此の人によつて果されたことは余の悅びに堪へぬ所である。

余は悅んで本書の完成を迎ふる者であるが、し

序

かし青木君の實力は決して充分にこゝに現はれて居ぬと思ふ。今後更に努力して、更に有益なる著述を出し、世間を啓發するにつとめられんことを熱望する。

大正六年五月

小林一郎

はしがき

「力の生活」！

日頃弱い自分の胸中に往來するものは唯だこの一事であつた。私はこの一事を得んが爲めに如何に煩悶し如何に努力したことであらう。殆んど今までの半生涯を全く之に費してゐる。然るに最近私の努力は漸くその答を得て、私は終にその「力」の發現なるものを法華經の殉教者日蓮聖人以下の人々の血涙の中に之を見出すことが出來たのである。

私は四方に索め上下に尋ねて容易に得られなかつたこの喜びを、獨り密かに味ふも惜しく、それら殉教者の悲壯なる血涙の痕を綴つて、私と同じ世の弱者にその喜びを頒ち、更に互の生活

はしがき

をして「力」あらしむべき伴侶にもとこの書を書いた。史實の正確は必ずしも期するところではない。唯だ直に史實の裏に漲つた「力」の心核を捉へて、之を讀む者の生活に移して貰へば充分である。

大正六年五月　伊豆天城山麓にて　著者しるす

法華魂目次

一　日蓮大聖人……一
上　伊豆俎岩の怒濤
中　龍口刑場の靈感
下　佐島配處の積雪

二　日昭上人……七
▲地涌本化の殿將軍

三　日朗上人……八
▲由井ヶ濱邊の唐紅

四　富木五郎胤繼……六

目次

▲外護扶宗の大檀那
五
四條金吾頼基……一一一
▲鎌倉武士の精華、俗日蓮
六
工藤左近尉吉隆……一四七
▲杜鵑血に泣く最後の聲
七
波木井六郎實長……一八〇
▲粉骨碎身九年の奉公
八
日頂上人……一八五
▲泣銀杏
九

日像上人……二一〇
▲由井ヶ濱の苦修立誓
十
熱原神四郎國重……二三一
▲一箭一唱血涙痕
十一
日親上人……二四三
▲血潮煙ぶる燒鐺の慘刑
十二
日經上人……二五三
▲六條磧の耳鼻削ぎ
十三
哀話
一妙麿
一山寺……二六八

目次

▲父親なし子
二 母白露の佗住居……三〇頁
▲初めて聞く父の消息
三 御師匠様の居間……三一頁
▲窓下に忍び泣く母の涙
四 再び母の佗住居……三二頁
▲餘處ながらの御暇乞ひ
五 旅寢の假り枕……三四頁
▲夢を破る犬の吠聲
六 鈴鹿峠の山賊の群……三五頁
▲不思議な主從の邂逅
七 鎌倉鶴ヶ岡の八幡宮……三六頁
▲一心罩めた法華經の讀誦
八 鎌倉殿の御館……三七頁
▲經の布施に父の一命

▲夢を破る犬の吠聲
六 鈴鹿峠の山賊の群……三三
▲不思議な主從の邂逅
七 鎌倉鶴ヶ岡の八幡宮……三六
▲一心罩めた法華經の讀誦
八 鎌倉殿の御館……三九
▲經の布施に父の一命

法華魂

青木白風著

一日蓮大聖人

上　伊豆俎岩の怒濤

六百年前、伊豆伊東の篠見が浦に五月の日は暮れた。

空には妖雲低く地を壓して浦頭の松上悲風叫び、前には海水空しく黑く展びて脚下の怒濤白く岩を嚙む、凄愴宛然大古の夕暮の如く物淋しい。

今し浦を離れて歸途を急ぎゆく一艘の小船がある。聲無く東を指して只管

に暗を走る。櫓の音のみキ、として更に寂莫を深むるのであつた。

「大分暗うなつて來た」殺したやうな低い聲。

「あれ、あそこに燈火が見えますぞ伊東の村でもあらうかな」

「成程燈火が見えてゐる。いや、燈火を後ろに闇を行くのは、餘り宜い氣持ではムらぬな」

「然樣でムる。まあ、正直に伊東まで往かぬから宜いやうなものゝ、これでは身共が流罪も同じことぢや」

「ハッ、、。流罪の御相伴は難有くもムらぬわい」

「こら船頭！　早う漕がぬか。女房め痛う案じて居らう程に」

「これは又痛いこと。成程若い女房を持つた身は、心配なことでムらうのう」

「それ！　そこに海坊主がッ！」

「えゝ！」と喫驚して

「えゝ意地の惡るい、喫驚りさしては善けないこと」

「ハッ、、、、いつかな日蓮奴も增じ來る海潮には我慢の腰も折れたであらう」

「鎌倉殿を物の數とも思はぬ面魂、えゝ小氣味のよい、今頃は波に喰はれて藻搔いても居らうかのう」

「波に呑れて禪天魔か？　ウッフッ、、！　早く往生するがよいわい」

何と云ふ無慘な聲であらう。後には、凄愴の氣のみ四方を罩めてゐる。

黑き惡魔の如く、背後に屹立せる一帶の屏風岩、打ち寄する激浪は一度そこに狂ひ亂れて韆轄たる怒號をなし、再び返り來りて又俎の岩に咆哮する。されど刻々に滿ち來る海潮には、その恐ろしい俎岩も最う呑まれてしまつた。あはれ情を知らぬ幕吏の爲めに、死ねよと計り岩の上に捨てられた大上

人の御身こそ風前の燈火である。無情の海水は、早や大上人の御足を浸しつゝあるのだ。

大上人キッと身を構へ給ひ、

「あゝ、あやめも分かぬ海上の離れ岩、元より法華經に捧げし我が身命ながら我れ若し衆生化益の功果さず、このまゝ海底の藻屑ともなり果てなば、その昔靈山の塔中に親り承け參らせし神力別付の佛勅を如何にすべき。天諸童子以爲給仕の經文空しからずば、日蓮が身に過ちある可からず。南無！妙法蓮華經如來壽量品第十六……」

と御經靜かに讀み給へば、暗は徒らに天地を罩めて、海潮は次第に高く法衣の裾を浸すのみであつた。

誦經畢つて、暫し朗らかに唱へまつる題目の聲は、遠く暗を衝いて海の面を渭つてゆく。

昔靈山の誓を忘れずば、神感爭でか空しかるべき。五月十二日の月はサッと妖雲を開いて、唱題合掌せる上人の身邊に、其の淡い光を投げたのである。闇は二つに割れる。一條の銀影遠く流れて潮風に翻へる上人の法衣に亂れ碎けた。御胸の邊りには、滴々月の雫が滴つてゐる。

「つい遠乘りをしてしまふた。然うぢや、今宵は丁度亡き父の三周忌！　早うもどつてこの魚なりと進ぜて、御念佛申さうわい」

一日の漁を終へて、今し浦を廻り來る一人の漁夫、小船の底に澤山の魚を收めて、おちこちの暗礁を避けながら闇を探つて歸つてくる。

「勝手を知つた海邊なれば、かうして危嶮は無いようなものゝ、垂れ込めた雲の所爲か、今宵の暗さは又一入である。えゝ危ないこと、この岩めが！」

と櫓を持ち直して漕ぐ折しも、何やら浪の音にかすれて響く人の聲がする。

「ハテ、不思議！」
と漕ぐ手を止めて耳を立てたが
「えゝ馬鹿なッ！　このやうな處に人の聲がしてどうしやう」
と自ら自分の耳を嘲つて、復た櫓を取り直せば元の寂莫！
「ハ、、、、、海に狐は居ないもの、豈夫憑されたのでもあるまいに……」
と船脚早めて漕いで來る。後には唯だ苔滑かな水草の音のみ、幽かに震へて殘つてゐた。
忽焉！　雲を拂つて照り渡る月光の末、見れば俎岩とも思はるゝあたりに一つの黑い影が立つてゐる。膝から下を浪に委せて、顏のみ月の光に蒼白く物悽い。漁夫は思はずゾットとして、
「えゝ、矢張り妖怪變化の惡戲か」
と餘りの事に櫓を放せば、船は無心に波に搖れつゝ岸の方へと流れて來る。

「不思議な事があればあるもの、したが、あの神樣のやうな神々しさ、身の毛もゾッとよだちさうだ。あれ〳〵何やら言つてゐる。」と耳を濟まして、「オオあれは確かに題目の聲、此頃鎌倉あたりに流行てゐるとの噂を聞いた」と漸く氣を取り直して、
「何はさて、眞實の人間に相違なし、早く御助け申して進せやう」
と船を進むれば一人の僧、浪に搖られながら、辛くも岩の上に立つてゐる。
「さては先程よりの題目の聲は、全く御僧の聲なりしか。こゝは伊東が岬の俎岩とて、磯根別れし離れ岩、この上汐時に何んとしてこゝにはお座し玉ふぞ」と息を喘せて問ひ質せば
「さればなり。我は鎌倉の日蓮と云ふ者、この度鎌倉殿の御勘氣を蒙つて伊豆の伊東に流罪の身なるが、役人衆の情無さには、疾く死ねかしと途中此岩に殘し置かれしものでムる……」

と云ひも終らず漁夫はツト片足を岩にかけ

「さゝ、何はさて、先づ此船に召されよ」

と大上人を勞りながら船に移し、自分の着てゐた蓑を其處に敷て進めた。

浪は最早や狂亂に勞れたか、今はあたりの岩を呑み盡して、唯だ物凄く流れてゐる。背後の岩に怒號する音のみ、更に其強さを增してゐた。

「御出家樣」と漁夫は櫓を持ち直して漕ぎ初めた。「我は此先き程遠からぬ川奈と云ふ磯村に住む彌三郎と申し、日に〳〵此岬に漁をして世を渡るもの。あゝ丁度此宵は亡き母の十三回忌、かうして御出家樣をお助け申すのもこよなき母への追善供養」と、そこの岩角を廻つて行手を指ざし「あれあそこに燈火が見えませう、あれが川奈の村でムりまする。早やう家へもどつて、粗末ながら御着替へなど進ぜませう。」

と彌三郎は、何か不思議な因緣に醉はされながら、漸く川奈の岸邊に船を

着けた。

「さ、御出家樣、お上りなされ」

と先づ大上人を船より助け、後から自分も船を仕末して陸に上がつた。

月は俄かに其の姿を隱して、空と水とは又復び元の暗黑に歸つた。後には涌き來る潮の唸るが如き音のみ聞えてゐる。

大上人は鎌倉よりの疲れに、急に眩暈を感じて一時は砂子の上に倒れ伏された。

「あ、今もどつた」と彌三郎は今日の獲物を其處へ置いて、背戸より內へ聲をかけて、「これが我等が伏屋でムりまする」と大上人を振かへつて會釋する。

粗末なあばら屋の屋根は傾き緣は朽ちて、周圍には苦枝なども亂雜に立てかけてあつた。

「あ、今もどらんしたか、今宵は如何した事かおかへりの遲い故、若しや途

中で間違でもありはせぬかと、先刻から案じて居りました。」

と草履をつつかけ、燈火を持つて迎えに出る。とヅブ濡れた大上人の疲れた姿にギョッとして、二人を等分に凝視めながら、不審の眉根をひそめてゐる。

「ハ、、、、何をそのやうに立つてゐる。珍らしいお客様をお伴れ申した。實はな――」

と聞きもあへず、女房夫れと察してフッと灯を吹き消し、

「今も今、村の莊屋様からの御布告には、若し此地に流罪せられた御出家に歸依供養をするものは、お咎めあるとのお沙汰でムりました」

と密つと夫の耳に囁けば、彌三郎も心得て

「早う洗足を持て」

と妻を促がして大上人に洗足を進め、上に請じて粗末な自分の着替を參らせた。

夫婦は萬一の事を氣勞ふて、外には見隱しの菰など掛け、心ばかりの夕餉を供養して、手早く納戸の方に大上人をお休め申したのである。

此處に大上人は三十日餘り、彌三郎夫婦の厚き情けに依つて、不自由もなく其日を送られた。其間に二人を敎化して、彌三郎には「船守」の姓をさへ賜ふに至つた。

……　日蓮去る五月十二日流罪の時其津につきて候しに、いまだ名をも聞き及びまゐらせず候ところに、船より上がり苦しみ候ひき處に、ねんごろにあたらせ給ひ候ひし事はいかなる宿習なるらん。過去に法華經の行者にて渡らせ給へるか、今末法に船守の彌三郎と生れかはりて、日蓮を憐み給ふか、たとひ男はさもあるべきに、女房の身として食を與へ、洗足手水其外さもねんごろなること、日蓮は知らず不思議とも申すばかりなし。ことに三

伊豆俎岩の怒濤

十日餘りありて、内心に法華經を信じ、日蓮を供養し給ふ事いかなる事の由なるや。かゝる地頭萬民、日蓮を憎み嫉む事鎌倉よりも過ぎたり。見る者は目をひき、聞く人は怨む。ことに五月の頃なれば米も乏しかるらんに日蓮を内々にてはぐゝみ給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云ふ處に生れかはり給ふか、……　彌三郎殿夫婦の士女と生れて日蓮法師を供養する事疑なし。さきに參らせし文に、具さに書きて候ひし間、今はくはしからず……伊東と川奈の道の程は近く候へども心は遠し、後の爲めに文を參らせ候ぞ。人に語らずして心得させ給へ。すこしも人知るならば、御爲め惡しかりぬべし。胸のうちに置きて語り給ふ事なかれ。あなかしこあなかしこ。南無妙法蓮華經

弘長元年六月二十七日　日蓮花押

船守彌三郎殿　許遣レ之

中　龍口刑場の靈感

こゝは津村の村端れに、七十近い一人の老婆が住んでゐた。

九月の蒸暑い或日の夕暮れ方、いつもの金次郎がやつて來て

「暑いのう婆さん、」と上がり框へ腰を下ろして。「茶でも一杯振舞ふてもらはうかな」

何か仕事をして居た婆さんは、退屈まぎれに宜い話對手を得たのを喜んで、機嫌よく

「さゝ、澤山お飲みなされ」と土瓶ごと其處へ出しながら、自分も風通しのよい處へ腰を下ろした。

潮風に曝された裏の大木に日暮しの聲が聞えてゐる。町人やら武士やらが、時々物惰さうに表を通つてゆく。本村にはもう灯が二つ三つ見え初めた。

若者は自分で茶をくみながら、

「今、あの、松葉ヶ谷でな、婆さん」と、お茶うけの代りに今見て來たことを老婆に物語る。

「はい〳〵。あの松葉ヶ谷と云へば日蓮樣の……」

「むん、その日蓮と云ふ坊主さ、仲々剛情我慢の坊主ぢやな」と若者は先程の出來事を再び頭に畫いて「その日蓮奴が、とう〳〵左衞門尉頼綱殿に召し捕りになつたわい」

「えゝ、あの日蓮樣が？」と老婆は思はず膝を乘り出して「それから如何なされた！」

頼みない老の身をかこちながら、前年鎌倉の寺詣に計らず大上人の說法を聽聞して、宿緣の誘ふまゝにそれよりは朝暮の題目修行、死を俟つ今の身には、せめて最う一度なりと大上人のお顏を拜むことが、何よりの希望であつ

たのである。

金次郎は手眞似身振を以つて、次のやうなことを老婆に話して聞かせた。

夕日も曇る今日の申の刻、丁度大上人が松葉ヶ谷の御庵室に、多くの弟子檀那を集めて說法の眞最中、庵の前方に當つて俄かに轟く人馬の物音、見ると平の左衞門尉頼綱を眞先きに胴丸烏帽子に身を堅めた武士共三百騎ばかり、手に〳〵槍太刀を提げつつ砂塵を捲いて押し寄せた。

軈て御庵室の前まで來ると、頼綱ハッシと馬を止め、聲荒らかに罵つて云うやう

「やをれ日蓮、汝が日頃の惡口雜言罪重し、今日死罪に行ふ可しと御館の嚴命なるわ、いざ尋常に縛に就くべし。若し逃げんず樣子のあるならば、ソッ頸卽坐に切り呉れやうぞ！」と馬を抑へて、威猛け〳〵に目を瞋らす。

龍口刑場の靈感

『日蓮これを見て思ふやう、日頃月頃思ひ設けたりつる事はこれなり。幸ひなるかな法華經の爲めに身を捨てん事よ。臭き頭べを放たれば沙に金をかへ石に珠を買へるが如し。』

大上人は立ち騒ぐ參詣の群衆を推し靜め、急ぎ立像の釋尊と法華經一部とを懷中して、やをら緣先き近くに歩み寄られた。

「日蓮決して逃げ隱れは致さず。法華經を身に讀み候ことの仲々に嬉しく候ぞ、いざ疾く〳〵召し捕れよ。されど天下の奉行とも候ものが事の邪正も聞き正さず。何故この日蓮をば召し捕はんとはすろ。不憐なり、今に自界犯逆難とて此國に同士討初まり、他國侵逼難とて他國より此國を責めらるべし」

と。これを聞いた平の左衞門尉、怒り心頭に轍して、恰も惡鬼の如くに大上人を瞋まへ

「此期に及んで憎き雜言！　者共、物な言はせぞ疾く召し捕れ！」

と大音揚げて部下を叱咤した。

『さて、平の左衞門尉が一の郎從小輔房と申す者走りよりて、日蓮が懷中せる法華經の第五の卷を取り出して、面を三度さいなみて、さん〳〵と打ち散らす。又九の卷の法華經を兵者ども打ち散らして或は足に踏み、或は身に纏ひ、或は板敷、疊等家の二三間に散らさぬ所もなし、日蓮大音聲を放ちて申す。あら面白や平の左衞門尉が物に狂ふを見よ。殿原但今ぞ日本國の柱をたをすと呼はりしかば上下萬人あわてゝ見えし。日蓮こそ御勘氣を蒙れば臆して見ゆ可かりしに、さはなくしてこれは僻ごとなりとや思ひけん、兵者どもの色こそ變じて見えしが……』

やがて身を高手小手に縛められて荒蓆かけた瘦馬の上に乘せられた大上人は、前後左右に長刀拔きつれた武士三百餘人に警護されて、一人御庵室を後に

されたのである。馬は心なく魚町の四ッ辻に出て、小町の通りを進んでゆく。

「どうぢやえ、あの風體は！」

「キッと阿彌陀佛の罰が當つたのであらう」

「これで我等も、腹の蟲か治まつたと云ふものぢや」

「したが、あの大樣な顏容はまアどこぞで圖太い奴であらうかのう」

など、辻々町々の人等は、兩の道側に立ち竝んで、皆な口々に大上人を罵つてゐる。

覇府の中心をなす華かな小町の通りには、如何にも都會らしい下町風の匂ひが、九月の蒸暑い夕暮の空氣に漂つてゐた。北一帶の山の手の木木の間に綴られた武家の館には、もう夕べの灯が涼さうに瞬いてゐる。

馬の鶴ヶ岡八幡の赤橋の前にさしかゝつた時、大上人は立騒ぐ警護の武士を制しながら、やをら馬を鳥居近く進ませられた。

「各各、騒がせ給ふな。最後に八幡大菩薩に申すことの候」

と馬より下りて遙かに神座に向ひ、

『いかに八幡大菩薩はまことの神か。和氣の清麿が頸を刎ねられんとせし時は、長一丈の月と顯はれさせ給ひ、傳敎大師の法華經を講ぜさせ給ひし時は、紫の袈裟を御布施に授けさせ給ひき、今日蓮は日本第一の法華經の行者なり。其上身に一分の過ちもなく、日本國の一切衆生の法華經を謗して無間大城に落つ可きを助けんが爲めに申す法門なり。又大蒙古國よりこの國を攻むるならば、天照大神正八幡とても安穩におはす可きか。其上釋迦佛法華經を說き給ひしかば多寶佛十方の諸佛菩薩集まりて、日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とを並べたるが如くなりし時、無量の諸天並に天竺漢土日本國等の善神聖人集りたりし時、各々法華經の行者に疎かなるまじき由の誓狀參らせよと責められしかば、一一御誓狀を立てられしぞかし。さる

龍口刑場の靈感

にては日蓮が申すまでも無く、急ぎ〳〵こそ誓狀の宿願を遂げさせ給ふ可きに、いかに此處には落ち合せ給はぬぞ……日蓮今夜頸切られて靈山淨土へ參りてあらん時は、先づ天照大社正八幡こそ起請を用ひぬ神にて候けれと、さし切つて教主釋尊に申し上げ候はんずるぞ、痛しと思さば急ぎ〳〵御計ひあるべし』

とて、復た馬に乘られた。

「えゝ、氣が狂ふたか日蓮奴、鎌倉殿の氏神に對して無禮の荒言！」

「だが不憫な者ぢやわい」

と又しても群衆等は立ち騷ぐ。遂にはドッと鬨をつくつて大上人を囃し立てるのであつた。

大上人を乘せた馬の、長谷の小路を過ぎて由井ヶ濱を通る頃には、岸打つ波の頭がほの白く闇に碎けてゐた。裳裾を吹く汐風は、ひや〳〵と氣持よく

水の面を滑つて來る。

御靈の前まで來た時、大上人は復も馬を止めて、伴の熊王を側近く召し寄せられた。

「四條金吾頼基の宅は、この祠の北なるぞ。疾く行きて我が最後の事を告げ知らせよ」

と云はれて熊王は、涙に聲も塞がつて、無言のまゝに闇を縫つて走つて行つた。

恁くと聞くより金吾頼基兄弟四人

「すりや、大上人には今宵龍の口にて御最後とな？」と取るものも取り敢へず、跣足のまゝに走つて來たが、その淺間しいお姿を見奉るや、感極つて口も利き得ず、只だ馬の口に取り縋つて、聲を立てゝ泣く計りであつた。大上人もそゞろに暗涙を催しながら、おん聲靜かに最後の告別をなされたのである。

『今夜頸切られにまかるなり。この數年が間願ひつる事これなり。此婆婆世界にして雉となりし時は鷹につかまれ、鼠となりし時は猫に喰はれき。或は妻に、子に、敵に身を失ひし事大地微塵より多し。法華經の御爲めには一度も失ふことなし。されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養心に足らず、國の恩を報ずべき力なし。今度頸を法華經に奉つて其功德を父母に回向せん。其あまりは弟子檀那等にはぶく可し』

賴基兄弟は言葉もなく、涙ながらに馬の口を取つて死出の御伴申し上げたのであつた。

馬は極樂寺の切り通しより、七里ヶ濱に差しかゝる。大上人は途中手づから裟袈を脱いで推し頂き、

「いかに濁惡の世なればとて、七佛傳來のこの裟袈を血に穢すは恐れあり」

と、路の邊りに差し出でた、松の下枝に之を掛けられた。馬は足搔き早く、頓て津村を通過するのである。

或は泣き、或は驚き、一什始終を聞き畢つた老婆は、この時不圖座を立つて

「まゝ、緩くりさつしやい」と云ひ捨てゝ、急ぎかまどに米をかけて、其まゝ背戸口を出て往つた。

軈て老婆は少し計りの小豆を持つて來て、それを鍋に入れて自在鍵にかけた。折り添ふる柴朶の煙りに老母は幾度か咽びながら、煮ゆるを俟つ間もなく、今迄老婆の樣子に驚かされてゐた金次郎は

「おゝ婆さん、早う出て見るがよい。日蓮奴痩馬に乘せられながら、松火に照されてやつて來た」

と戸口に立つて見て「えらい御邪魔しました。復た來るわ」

とブラリ出て行つた。

「折角赤豆餅なと、御供養申さうと思ふたのに……」

と老婆は、老の身の不自由なのをかこちながら、赤豆の煮えぬのを悲んだ。

不圖、菊の節句の赤飯に、祝ひ殘つた胡麻鹽のあるを思ひ出して

「おゝ、それ〳〵」と飯を握つてそれにくるめ、鍋蓋の裏に盛り並べて急ぎ表てによろぼい出でた。

松火の火に照されながら、物々しい警護の武士に送られて、死出の旅路を痩馬に急がせらるゝ大上人のおん姿は、老婆の目にも、現世の事實とは思はれなかつたのである。

大上人は涙ながらに捧ぐる老婆の志を受けて、珠數推しもみながら、供養於法師と、回向さるるのであつた。

これより、馬は程なく腰越を通つて、頓がて名も恐ろしい龍口の刑場に着いた。罪人を眞中に、それを圍む人々の顏を火影の照した光景は、恰然地獄の底を覗くやうにも思はれた。前方の闇の中には、物凄く波の音が聞えてゐる。

昔の事であつた。龍口の北に當る深澤と云ふ大きな湖水の中に、一匹の毒龍が住んでゐた。常に淵を出ては、人の子を喰らつてゐる。已にそこの長者は、其の最愛の五子を皆喰はれてしまつたと云ふことである。

欽明帝の十年夏四月、一天俄かに掻き曇つて、雷電空を駈り、妖霧遙かに津村の海上に立ち迷つて、沖合には鳴動の音さへ聞へた。と、見る間に、軈て空は忘れたやうに晴れ渡つて、波は春の如く靜かに流れてゐる。見れば不思議にも波の上に一つの島が湧き出てゐた。何處からとも無く微妙の樂の音は人々の耳朶をかすめて、五色の華は明るい空を彩つて、チラ〳〵と降つて來る。其間忽然として一人の美しい天女が天降つた。今の江の島の辨財天が

それである。

此時、彼の深澤に住む惡龍は、辨財天の美しい容色に迷つて、忽ち其本能を現はし、直にその毒々しい火のやうな戀を傾けて、自分の意中を云ひ寄つた。時に辨財天示して云く

「同じ非類の畜身なれども、我は天竺無熱池なる、婆竭羅龍王第三の女にして、八歳龍女の妹なり。今年欽明帝の十三年、佛法始めて此國に渡る。其を守護なさんが爲め此土に降臨なしたるなり。汝は無道の惡龍にして、人を噉ふ邪神なりと聞く。若しその邪心を翻がへし、共に正法を守護なさば、父の龍王に申して、偕老の契を結ぶべし」

と、於是深澤の惡龍、忽ち惡心を轉じて、固瀨山上に龍口明神と顯れ、近く江の島の本社と相對つて座を鎭めたのである。惡龍乃ち天神地祇に誓つて云く

「吾假令惡心を轉ずるも、昔より人を喰ひし餘習已に久し。願くば是より以後、王法に背く不忠不孝の罪人をば。吾前に於て刑罰し給へ、吾其血を啜つて精心を增し、佛法を守護し、邪正一如の夫婦、神力を合はせて、必ず國土を守るべし」

と、以後相模一國は、此龍口明神の社の前を、死罪の場と決めたのであると云はれてゐる。されば龍の口と江の島の兩社は、元來正法守護の爲めに、茲に鎭坐ましまして居るのである。其神前に正法弘通の行者を引き据ゑ奉つたと云ふことは、實に不思議の中の不思議と云はねばならぬ。

松火に透して見れば平砂渺々たる渚間近には嚴しく棚欄を結ひ構へ、縱横に幕を張り渡してある。警固の武士は篝火を取り圍んで、各々容易ならぬ顏容をしてゐる。大上人は手荒き武士共に、馬の上より引き下ろされて、敷皮の上に座らせられた。

龍口刑場の靈感

あゝ、此光景を見て、誰れか泣かぬものがあらうぞ。

『左衞門尉、只今なりと泣く。日蓮申すやう、不覺の殿原かな。これほどの悦びをば笑へかし。いかに約束をば違へらるゝぞ』

と。大上人は却つて自分を哀む金吾を哀み慰むるのであつた。

此時松葉谷の御庵室には、取り殘された夥多の弟子檀那、日朗日進日興日向等を始め、四條池上荏原等隨身の法子、歸依の善男善女等、スワこそ御師の一大事と、口々に御題目を唱へながら急ぎ後追ひ來て見れば此光景！　見るも痛しや槍壘の中、荒菰の上。

「エ、、天には神も在さぬか、何故なれば恁くは正法の行者を憎ぞ」

と、或は天に慟し、地に哭し、或は我身を代へてと槍壘の中に頸差し出す愛別離苦！

山の如く動かず、チツと瞑目してゐた大上人は、此時靜かに槍壘の外に目を見遣り、

「あゝ、端なき振ひかな、如何なれば日頃の約束をば違へらるゝぞ。『過二一期一事無レ程。いかに强敵重なるとも、ゆめ〳〵退する心なく恐るゝ心なかれ。縱ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば稜鉾を以つてつゝき、足には釘を打つて錐を以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經。無南妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死るならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來つて、手を取り肩に引懸けて靈山へ走り給はゞ、二聖二天十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し、旛を上げて、我等を守護して慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり』」

と、我無き後の、彼等の決心をば、キツと固められたのであつた。

下知は下る。太刀取依智の三郎直重はヌツクと立て、兼て聞ゆる三尺二寸の名劒蛇胴丸を拔き放ち、玉散る刄尖に水打ち漉いて、軈て大上人の背後に

廻つた。――と暫く大上人の後姿を見下ろしてゐた彼は、何思つたか不圖兩眼より涙をハラ〳〵と落して、靜かに小腰をかゞめ

「如何に日蓮御坊よ聞召せ、御身は大德の出家なりと聞き侍る。强盜夜討の罪もなく、謀叛殺害の科もなし。唯新法の題目を弘めんと諸宗を謗り玉ふより、唯今命に及ぶなり。この直重も齡はや五十、如何に天下の嚴命なればとて、老先き近き身を以つて、佛法弘通の御身を切るも罪いと深く覺ゆるぞ。今日より改心して念佛無間の法門を罷め、その題目を捨て玉はゞ、奉行に言ひ譯して、我身にかへても命を救ひ參らすべし」

と、聲を曇らせて耳うちすれば、大上人は厚く其志を謝しながらも

「否とよ、是等の事は、已に覺悟の前なるわ。今幸に臭き頭を捨てゝ佛果を得るならば、砂に金を換へ、石に玉を買へるも同じ、イザ疾く打たれよ。されど不憐なるかな『日蓮只今佛果に叶ひて寂光の木土に居住して自受法樂

せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値はん時、我等如何計り無慚と思はんずらん。汝等如何計り羨しく思はんずらん』。不憐なり」

と、囁き玉ひて、聲いと嚴かに、最後の御題目を唱へらるゝのであつた。此手弱い有樣に、先程より焦燥切つてゐた賴綱は、ツト馬足を進めて、滿面に朱を濺ぎ

「ヤア〳〵、氣後れしたか直重、佛陀の怨敵疾く打たぬかッ」

と、大音揚げて罵つた。直重も

「あゝ、今は是れまでなり」

と、涙を拂つて立ち揚がり、見苦しき切り態して、人の笑を招くも無念と、一刀高く振りかざして、氣合諸共ヤッと計りに切り下ぐ一刹那！　不思議や、俄然滿天墨を流して、大風礫の如き雨を捲き、海吠へ山動いて恰しき鳴動遠く聞へ大地も爲めに碎くる計り、立て列ねたる松火提灯篝火も一時にサッと

吹き消されて、天地は只だ一抹の暗に黒く塗られてしまつた。

と、此時

『江の島のかたより月の如くなる光り物、鞠のやうに辰巳のかたより戌亥のかたへ光り渡る。十二日の夜のあけぐれ、人の面も見えざりしが、物の光り月夜のやうにて人々の面も皆見ゆ。太刀取目くらみ仆れ臥し、兵共を打怖れ、興醒めて一町計りはせのき、或は馬より下りてかしこまり、或は馬の上にて蹲踞れるもあり

日蓮申すやう、「いかに殿原、かゝる大禍ある召人には遠のくぞ。近く打ちよれや」

と、高々に呼はれども、急ぎ寄る人もなし

「さて、夜明けなば如何に〳〵。頸切るべくは、急ぎ切るべし。夜明けなば見苦しかりなん」

と、勸めしかども、兎角の返事もなし。はるか計りありて

「相模の依智と申すところへ入らせ給へ」

と、申す

「此れは道知る者もなし。さきうちすべし」

と、申せども、うつ人も無かりしかば、さてやすらう程に、或る兵士の云く、

「それこそ、その道にて候へ」

と、申せしかば、道にまかせて行く。午の時計りに依智と申すところへ行き着きたりしかば、本間の六郎左衞門が家に入りぬ。酒取り寄せてものふどもに飲ませてありしかば、各歸へるとて頭を垂れ、手をあさへて申すやう

「このほどは如何なる人にてや座すらん。我等が賴みて候阿彌陀佛をそ

龍口刑場の靈感

しらせ給ふとうけ給はれば憎みて候ひつるに、親り拜み參らせ候つる事どもを見て候へば、尊さに年頃申しつる念佛はすて候ひぬ」とて、火打袋より珠數とり出して捨る者あり。今は念佛申さじと誓狀を立つる者もあり。六郎左衞門が郎徒等番をば受け取りぬ。左衞門尉も歸へりぬ。其日の戌の時計りに鎌倉より上の御使とて立文を以て來ぬ。頸切れと云ふ重ねたる御使かと、ものゝふどもは思ひてありし程に、六郎左衞門が代右馬尉と申す者立文を持ちて走り來り跪きて申す。

「今夜にて候べし。あらあさましやと存じて候つるに、かゝる御悅びの御ふみ來りて候。武藏守殿は今日卯の時に熱海の御湯へにて候へば、急きあやなき事もやと、先づこれへ走り參りて候。鎌倉より御使は二時にはしりて候。今夜の內に熱海のお湯へは走り參るべし」とてまかり出でぬ』

『追狀に云く、此人は失なき人なり。今暫くありて赦させ給ふべし。過ちしては後悔あるべし云云』

下　佐島配處の積雪

龍の口に危き難を遁れて漸く依智に着かせられた日蓮大上人は、此地に止まること二十日餘り、法體休まる暇とてもなく明日は復た北海の孤島佐度ヶ島へ遠流せられねばならぬ身の上となつた。その夜大上人はまだ十月と云ふに坐ろに迫り來る寒さに法衣の襟を搔き合せつゝ、此地へ名殘の經少し計り誦し終つて、軈て獨り影暗き孤燈に向はせられた。ゆくりなくも越し方の何彼、殊には龍の口に於ける不思議の靈感など遠い夢の如く頭を去來して、快い瞑想に時を移さるゝこと多時。夜は刻々に更け往いて戶外には霜の結ぶ音も幽かに聞ゆるやう。死のやうに冷たい風が身を切る如く襖を洩れてくる。大上人は油の盡きてヂゞと鳴く燈火の心を搔き立てながら、フト明るくなつた室內を

見廻はされて、何思つたか人知れす法衣の袖に涙を拭はれた。そこには例もの優しい日朗の姿が見えなかつたからである――と思ひは端なくも宿谷の土の牢にある日朗の身の上に運ばれて、大上人は不憫の情抑へ難く、手早く氷る矢楯の水を燈火に溶かして紙差しのべ、一封の書を認めて、偖靜かに夜の明けゆくのを待つた。

翌れば十月十日、大上人には警護の武士に圍まれていよ〳〵依智を御發足、御供には日興日向富木殿よりの入道一人、日朗の母妙一尼よりの使者、其外熊王四郎など五六人を引連れ、途中種々の不思議を顯はしつゝ、廿一日の夕暮方、漸く越後の國三島郡寺泊の宿に着かせられた。大上人は茲に船路を待るゝこと六日間、廿七日の朝、海上やゝ穩かなるに官人どもの頻りに船艤に喧しきを見て、その渡海の準備なるを知召し、偖左右を顧て云はるゝやう

『各々はこれより家路へ歸りたまへ。人夥多引き具して彼地へ渡ること、鎌倉殿への憚りもあり、反つて日蓮が爲めにあらず、時來なば復た再會の折もありなん」

と、一同にあかぬ名殘を惜みつゝ涙を袖に推し隱して、軈て用意の船に移り乘られた。

けれども此日海上俄かに風荒れて御船は遂に蒲原郡角田の岸に吹返されてしまつた。そこで大上人は毒龍降伏の御經を認めて天子ヶ嶽の巖窟内に之を對治し、翌廿八日、早天順風に帆を上げて復び又角田を出帆遊ばされた。

然るにこの日も亦、海上遙かに雲亂れて逆風吹き起り、見る〳〵激浪山の如く天地を壓して怒號の聲は耳朶を聾する計り。揖柄折れ帆綱は切れて水手も爲に措を失ひ、御船は今や危く覆へらんとした。此時大上人は泰然としてキッと舳前に立ち顯はれ、珠數おし揉みながら暫し海神に向つて法味を捧げ、軈て水棹を取つて海面深く南無妙法蓮華經の七字を書かれた。それより波

は不思議にも漸次靜かに治まつて、御船は無事に、その日の夕つかた佐渡國羽茂郡松ケ崎村甲の瀨の岸に着くことを得たのである。

大上人は少しも勞れたる氣色もなく船を下るや、傍にある磯邊の大石に題目を書して先づ此國に妙法の流布すべきを表し、軈て官人どもの勸むる形ばかりの夕餉をしたゝめられた。

すると其時一人の官人進み出でゝいふやう

「これより御身は、その道を辿りて新穗の邸へ行き給へ。御身流罪の下知狀は我等が確と預りあれば、用濟み次第明日また途にて追付くべし」

と、そのまゝ一同は何處ともなく磯傳ひに立ち去つてしまつた。

刻一刻、夕暗の迫つてくる孤島の海岸には寂寥の氣が滿ちてゐた。脚下に碎ける波の音は、悲しい異鄕の調を奏でゝゐる。行先には暮れゆく曠野の徒らに茫々として續くばかり。大上人は詮方なく、『數々見擯出、遠離於塔寺』

と口づさみながら、敎へられたるまゝ、夕霜冴ゆる細道を辿り辿つて、その夜は松前明神の御堂に一夜を明かし、廿九日の夜は雜太郡小倉なる神職の舍に宿を求め、その明の日漸く新穗なる本間六郎重連が邸に辿り着かれた。

翌れば霜月の朔日、此日天寒ふして雲重く、雨さへ雪を交へて降り出すその中を、大上人には僅かに一蓑一笠、重連が下知として遂に大野の鄕塚原の地に追放の身の上となつたのである。

塚原！　あゝ死人を棄つる三昧原！　見渡す限り西も東も唯茫々たる枯尾花の海、朽ち老りたる名もない卒塔婆がその間を黑く覗いて、累々たる古墳の頭が寂げに浮んでゐる。雨と雪とは遠く野末に烟つて、荒凉、轉た鬼氣の迫るを覺ゆるものがあつた。大上人は玆に漸く一間四面の小さな堂を探り當てゝ僅かにそれに入る事を得たのである。

後、大上人は身延より遙かに當時を追懷して恁ふ書かれた。

『十一月一日に六郎左衞門が家のうしろみの家より塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる處に、一間四面なる堂の佛もなし。上は板間あはず、四壁はあばらに、雲降り積りて消ゆることなし。かゝる處に敷皮打ちしき蓑うち着て夜を明かし日を暮らす。夜は雪雹雷電ひまなし。晝は日の光もさゝせ給はず、心細かるべき住居なり。彼李陵が胡國に入りて巖窟にせめられし、法道三藏の徽宗皇帝にせめられて、面に火印をさゝれて江南に放たれしも只今とおぼゆ。あらうれしや、檀王は阿私仙人にせめられて法華經の功德を得給ひき。不經菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて一乘の行者といはれ給ふ。今日蓮は末法に生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる責にあへり。佛滅後二千二百餘年が間、恐くは天台智者大師も一切世間多怨難信の經文をば行じ給はず。數々見擯出の明文は但日蓮一人也。一句一偈我皆與授記は我也。阿耨多羅三藐三菩提は疑ひなし。相

模の守殿こそ善知識よ。平左衞門こそ提婆達多よ。今の世間を見るに、人をよくなすものは方人よりも强敵が人をばよくなしけるなり――日蓮が佛になならん第一の方人は景信、法師には良觀道隆道阿彌陀佛、平左衞門尉守殿ましまさずんば、爭か法華經の行者とはなるべきと悅ぶ』

松柏雪を得て更に綠を增し、梅花寒に堪えて獨り春に微笑む。艱難は却つて益々大上人の信仰を强め、刀杖は愈々大上人の悅びを增す計りであつた。けれども北海の荒海雲を起して七尺の軒も一丈の雪に埋れ、身を覆ふものとては僅かに一蓋の笠一葉の蓑、幾日は暮るゝも食さへ參らす人もなき折柄、思はず亂れて遠く故郷に亡き父母を偲び、或は又鎌倉に走つて弟子檀那等の身の上を氣付はれるのである。その時、大上人の眼にはいつも熱い涙が潸然として流れるのであつた。

『御勘氣の身となりて死罪となるべかりしが、暫く國の外に放たれし上

は、おぼろげらなでは鎌倉へは歸る可からず。かへらずば又父母の墓をも見る身となり難しと思ひ續けしかば、今更飛び立つ計りくやしくて、などかゝる身とならざりし時、日にも月にも海も渡り山をも越えて父母の墓をも見、師匠のありやうをも訪ひおとづれざりけんとなげかしくて、彼の蘇武が胡國に入りて十九年雁の南へとびけるをうらやみ、仲丸が日本國の朝使として唐に渡りてありしがかへされずして年を經しかば、月の東に出でたるを見て、我國みかさの山にも此月は出でさせ給ひて故郷の人も唯今月に向ひて眺むらんと心をすましてけり――されば大海の底の千引の石は浮ぶとも、天より降る雨は地に落ちずとも、日蓮は鎌倉へは歸る可からず』

されど又大上人は思ひ返して

『但し法華經のまことにおはしまし、日月我を捨て給はずば、かへり入りて又父母の墓をも見るへんもありなん』

と、僅かに心を慰められるのであつた。

餓と寒さの中に、日は七日と過ぎ八日と消え去つた。その八日の夕暮方、大上人にはいつもの如く軒場の雪に咽喉を濕し手を清めて、隨身佛の御前に端座し、身を降りつむ野邊の雪風に曝しつゝ、餘念もなく御經を讀誦遊ばされてゐた――と、それとも知らず此方には、その時ソッと御堂の蔭に身を寄せた一つの黒い影があつた。

* * *

雪は益々降りしきる――

黒い影は暫く御堂の内にヂッと耳を澄まして佇んでゐたが、軈て靜かに笠を取つて顔を拭ひ、蓑を脱して肩の雪を拂つた。見れば八十の坂を二つ三つも越えたかと思はれる鑠鑠たる一個の老武士、身には甲冑こそ着けね、やゝ

曲つた腰に大小を手挿み、眼に何か決心の色を浮べて、口を堅く眞一文字に引き結んでゐる。

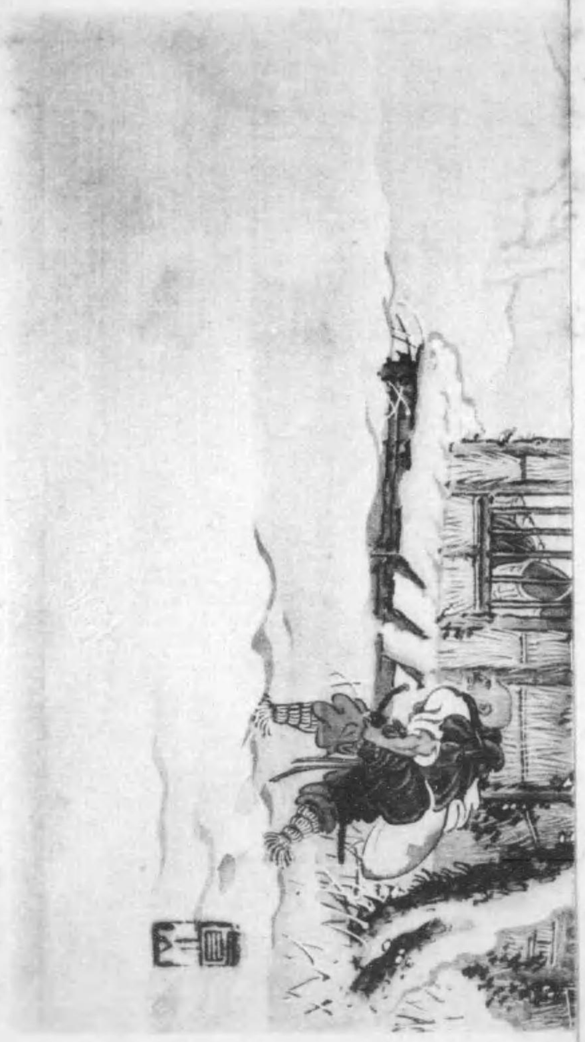
彼は盜むが如く、夜目にも雪に明るい堂内を見廻はして、その片隅に經讀む大上人の後姿を見奉るや、老の兩眼忽ちカッと見開いて、思はず刄の柄に兩手を掛け

「汝、阿彌陀如來の大怨敵！」

と、唯一打ちに、雪を蹶立つて躍り出でやうとしたが、此時フト思ひ返して呟くやう

「僅か高の知れたる痩道心、彼如何に狂ひ向ふとも、屠るに何の仕損じかあるべき。それよりは、一と先づ彼が法門を問ひ糺して、返答詰まるその時に、暇取らするも遲くはなし」

と、どつかと堂に押し上りて會釋もなく、土足のまゝ大上人の面前に立ち寒

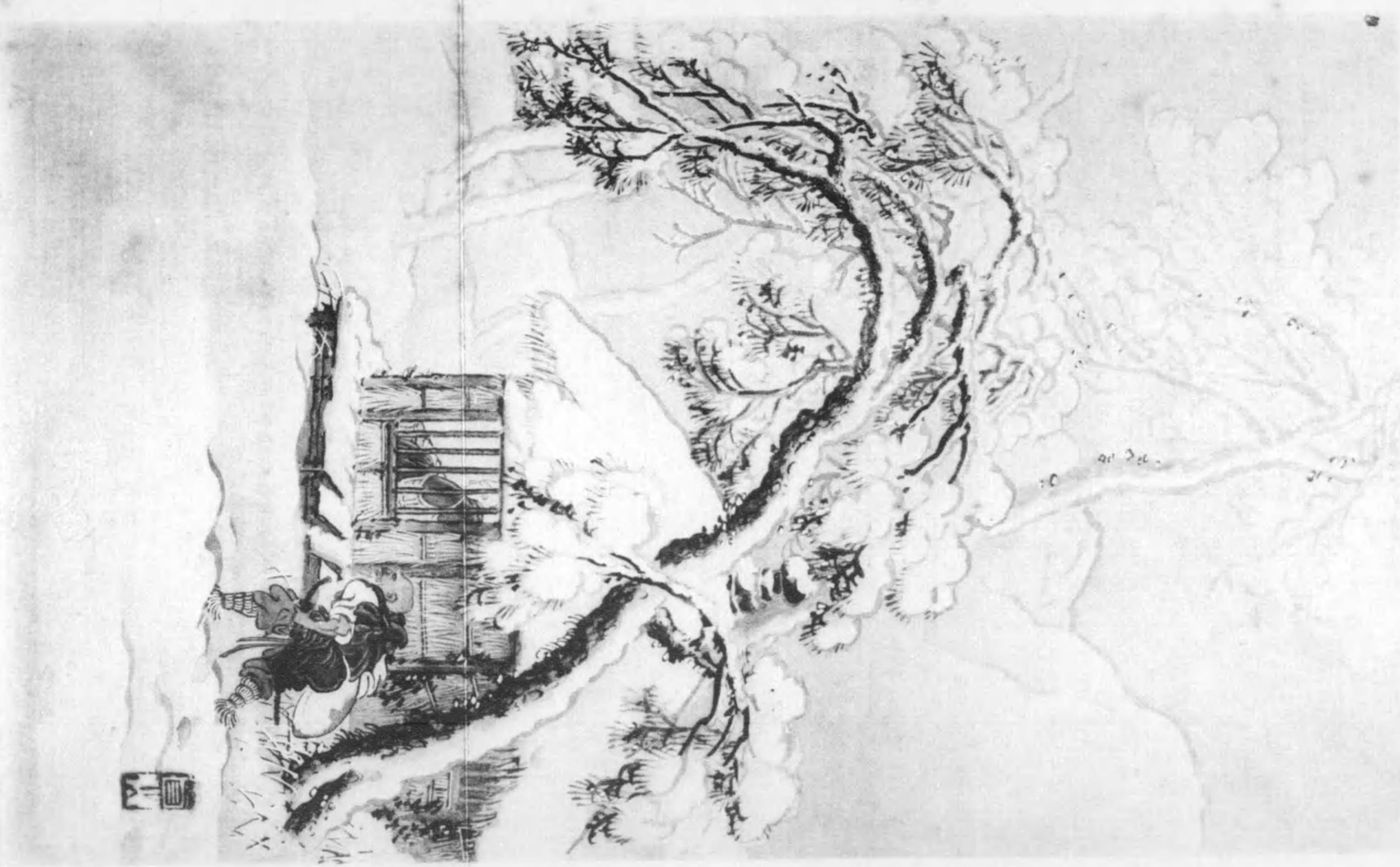


堂　昧　三　原　崇

と、唯一打ちに、雪を蹴立つて躍り出でやうとしたが、此時フト思ひ返して呟くやう

「僅か高の知れたる瘦道心、彼如何に狂ひ向ふとも、屠るに何の仕損じかあるべき。それよりは、一と先づ彼が法門を問ひ糺して、返答詰まるその時に、暇取らするも遅くはなし」

と、どつかと堂に押し上りて會釋もなく、土足のまゝ大上人の面前に立ち塞



がつて言葉も荒く

「我は念佛の行者遠藤爲盛と云ふもの、夜中態々これまで推參せり。法門一つ承はらん」

と、勢猛にハッタと大上人を睨み下した。

此時大上人は少しも騷がず、靜かに經を卷き收めて恭しく立像の釋尊を三禮し、やがて此方に向き直つて先づ爲盛に座をすゝめ

「人里離れしこの三昧原に、如何に法門の爲めとはいへ、夜中雪を侵して態々の御越し。日蓮恐悅に存じ奉つる——。して卿が尋ぬるその法門とは如何樣の筋なるや。日蓮仔細に承はるべし」

と、たとへ身は餓に勞れ、法衣は垢に染まるとも、自らにして具はる本化の威風、爲盛やゝ心に怖れを抱きしが、言葉のみは猶も荒く

「汝が日頃喚き呼ぶ、諸宗無得道、法華獨一の成佛とは、何れの經文にその

證據ありや」

「されば なり」大上人はやをら膝を進めて聲嚴かに「汗は遠く之を求むるに及ばず。卿が賴む淨土の三部彌陀經の其中に、三十八個所まで名を呼ばれたる舍利弗尊者すら、その經にては遂に得道なく、却つて法華經第二の會座にして、妙法蓮華經を以つて華光如來となり給ひしぞかし。こゝを以て釋尊は無量義經にしては『四十餘年未顯眞實』と說き、法華經方便品には『正直捨方便但說無上道』『無一不成佛』と示されたり。念佛者の無得道、火を賭るよりも明かなるにあらずや。

と、打笑み給へば、爲盛は唯だ慌れはてゝ口塞がり、握りし拳も何時しかゆるんで目を瞬き、それより膝折り直して不審の條々を問ひ糺せば、恰も谺響の聲に隨つて答ふるが如く宿緣の誘ふところ、本化の法門やゝ魂に浸み渡つて、遂には老の兩眼に涙を浮べ

「あゝかゝる貴き御房とも知らず、先程よりの數々の御無禮、何卒幾重にも御許し下されたし。この爲盛、實は遠藤武者盛遠より四世の孫なるが、故あつて先年この島に流されてよりは、憂世の中の惡業煩惱、是も亦非なる理を悟りて夫婦もろとも剃髮なし、それよりは朝夕念佛唱名に明し暮したる者。この程人の噂によれば、諸萬人の惡智識たる鎌倉の日蓮と言ひしもの、幸にも此島に流されたりと聞き、密かに妻と喋し合して老の身をも打忘れ、せめては彼が頸を搔き切つて、阿彌陀如來に回向せんと思ひ立ち、この降る雪を侵しつゝ、忍び來てみれば不思議の因緣、宿種の未だ枯れざるか、却つて御房の敎化を蒙り、初めて無明の夢より覺めたる嬉しさ」。

と、眞心面に溢れ、懷より念佛の珠數取り出してプツッと之を切り、

「願くば御房よ。この老爺をも、大慈を以て御弟子の一分に加へ置かれたし」

と、頰を傳はる悲喜の涙は、潸然として彼が膝を濕すのであつた。

かくとも知らず爲盛が妻は、夫の歸りの遲きを案じ煩ひつゝ、後追ひ來つて暫く堂側の雪蔭に身を潛め、先程よりの大上人の敎化、夫の得道、あら〳〵之を聞き終つて、涙ながらに大上人の御前にまろび出で、共に頭を雪に埋めて、その授戒を願つたのである。於是、大上人も彼等が眞情を憐んで、快くその請を容れ、更に種々の說法を賜つて、共に不思議の因緣を悅ばれたのであつた。

それより夫婦は、密かに飯櫃を古葛籠に入れて之を背負ひ、人目を忍びつつ毎夜代る〴〵大上人を塚原に供養し奉ること百日餘り、大上人も痛くその志を感じて、百日の功德は千日の修行にも尙勝るとて、妻を千日尼と呼び、夫をば阿佛房日得と名けられたのである。

『天の御計ひはさておきぬ。地頭地頭、念佛者念佛者等、日蓮が庵室に晝夜に立ちそいて、通ふ人もあるをまどわさんとせめしに、阿佛房にひつをしおわせ、夜中に度々御わたりありし事、いつの世にかわするらん。只悲母

の佐渡國に生れかわりてあるか云云』

これは後年、上人が遙かに身延より二人に寄せられた御消息の一節である。

* * * * * *

偖、去ぬる九月十三日より、宿谷光則が土の牢に囚はれの身となつた弟子日朗は、その後恰も影の身に離れたるが如く、唯だ〳〵師の房の戀しさに、幾日幾夜を、獨り冷たい牢獄の中に泣き明してゐた。

土の牢！　あゝ何んといふ痛ましい名であらう。低く垂れた土の天井から落つる雫は、滴々凝つて膚に薄い氷を結ぶこともあらう。濕つた土の床から泌み入る冷さは、絕えず身内に冷へ渡つて、五體も死のやうに冷たいこともあらう。晝は日の光さへ見ること叶はず、夜はたゞ窓外に悲げなる梟の聲を聞くばかり。僅か日に一度、窓より差し呉るゝ握飯も咽喉に塞へて、日朗の身は、日一日と削られた如く瘦せ細つて行つた。

牢獄の身となつてから最早や一ト月餘り。冬の日脚の短かくて、今日もはや黄昏近くならふとする比、日朗は今しも夕の經を誦し終つて、凍えた指先を冷たい懐に暖めながら、見るともなく窓越に、暮れ行く空の色を眺めて、獨り悲しい思ひに包まれてゐた――と、思ひは例もながらに御師の身の上に走つて、又しても熱い涙は、法衣の袖を絞のであつた。

「あゝ御師には、その後何處に如何なる憂き目を重ね居たまふにや、唯だ佐度ケ島へ遠流と計りにて、その他のことは一切聞き進らすることも得叶はず。日朗若し監禁の身にしあらねば、假令地の底雲の上なりとも、必ず御共してお給仕申し上げ侍らんに今はそれも心に任せぬ身の不幸！　あゝ返す〴〵も口惜きは、甲斐なき日朗が身なるよな――」

と、思ひは麻の如く亂れて、果ては身を震して、泣き崩るのであつた。

此時突如！　一人の牢守、窓の外に叫んでいふやう

「日蓮房よりの消息にて候ぞ」

と、聞より日朗、サッと身を起して

「何御師よりの御消息とな？」

餘りの嬉しさに、夢かとばかり目を瞠れば、あはれ窓より差し出されたる一通の卷き文！

「さては御師には無事なりしか、あゝ難有や南無妙法蓮華經！」

と、窓際近く轉び出で、恭しくお文を推し戴き、震へる手先に急ぎ開封すれば、言々悉く是れ血涙の文字。

『日蓮は明日佐渡國へまかるなり。今夜の寒きに付ても、牢のうちのありさま、思ひやられて痛しくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり。法華經を餘人の讀み候は口ばかり、言は讀めども心は讀まず、心は讀めど

も身に讀まず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。天諸童子以爲給使、刀杖不加毒不能害と說かれて候へば、別の事はある可からず。籠をばし出させ給ひ候はゞ、とく〳〵來り給へ。見たてまつり、見えたてまゝらん。恐々謹言

文永八年辛未十月九日

筑後殿　　日蓮

と、讀み終つた日朗は、早や感極まつて身も世もあらず、そのまゝお文を顏に推しあてゝ、よゝと許りに泣き崩折れるのであつた。

「えゝ御師には、明日はいよ〳〵佐渡が島へお立ちなさるとや。佐渡といへば、北海の荒浪に漂ふ離れ島、嘸かしお寂しいことで御座りませう。それを露、御身のことは少しもかこち給はず、却つてこの甲斐ない日朗ばし思はれて、痛しいとの御言葉、冥加身に餘つて、日朗は空恐しう覺えまする」

と、漸く法衣の袖に涙を推し拭つて、復た新しい涙と共に讀み返へす懷かしい御師の文！

「たとへ鳥の翼は持たずとも、必ず神と佛のお力にて、キッとお側へ參りまする。それまでは隨分ともにご機嫌よう、お身體を大切に御自愛なされて下されませ……」

と、またしても物狂はしう、身を悶えながら、冷たい土の床に泣き崩折れてしまつたのである。

それからといふもの日朗は、この懷しい卷文を御師と思ふて、朝夕看勤の折は勿論のこと、暇ある毎に繰り展げては、聲靜かに涙に咽びながら、毎日これを讀み上げて、僅かに牢獄の冷たい生活を慰めてゐた。

或日のことであつた。牢の中からは、いつものやうに日朗の卷文を讀んで

は啜り上げ、啜り上げては復た讀み續く、物悲氣な聲の、惻々として人に逼るが如く窓外に響いた時、先程より頻りにこれを傾聽してゐた一人の牢守は、如何にも感に堪えぬものゝ如く、潤みくる涙に目を瞬きながら、密つと相手の顔を見上げて

「御同役！」

と、嗄れた聲に呼んでみた。

御同役と呼ばれた牢守は、これも先程より腕を拱いたまゝ、下腑向いてヂッと牢内の聲に耳を傾けてゐたが、この時フト顔を擡げて

「何んぢや？」

と、靜かに問ひ返した。見ればその目にも、どうやら涙の露が潤んでゐる。

「おゝ、それでは矢張り貴許も……」

「そういふ貴邊も、あの日朗に……」といひ指して、密つと四邊に氣を配りながら「矢張り歸依ばしておられしか！」

「お師匠よりのあの消息、毎日それを聞く毎に、何にも知らぬこの身まで、遂ひ〳〵貰ひ泣をしておつたわ」

「今までは、やれ情剛よ、阿彌陀佛の敵よと、隨分酷い目には合せおつたが、あの憐らしい姿を見ては、どうしてこれが感ぜずにゐられやう」

「してみると、このやうな弟子を持つからには、日蓮房といふも、定めし偉いお方に相違あるまい」

「題目とてもその通り、キッと念佛よりは、功德も尊いことであらう」

「されば世の諺にも、思ひ立つたが吉日とか、今日こそはブッツリと、念佛の珠數斷ち切つて、日蓮房の信者になるとしやう」

と、懷から、念佛の珠數取り出して、一人がこれをブッツと斷ち切れば、一人も亦自分の珠數を取り出して、ブッツリこれを斷ち切りながら

「あゝ、無明とやらの雲も晴れ去つて、如何にも清々しい心地がする」

と、二人は互に顔を見合して、嬉然嬉そうな笑みを交すのであつた。

かくて彼等は、心から漸く日朗の德に感激して、それからといふもの、何くれとなく日朗を勞はり慰め、時には又微妙なる本化の法門に耳を傾けて、往々自分の責任さへ忘れることが數々であつた。そして又一方にはこの牢を預かれる、奉行宿谷左衞門尉光則にも、それとなくこの由云ひ聞えて、遂にはその頑固なる心をも、和げ得たのであつた。それが爲めこの頃では、光則も漸くその德に感じて、知らず〳〵法華經に歸依するやうになり、潛かに袖の中に法華の珠數を爪繰る樣にさへなつた。

或時例の牢守は、手に六七個の盧橘の實を持ちながら、牢屋の外に立つて、勞はる如く日朗を窓際近く呼び寄せた。

「これは唯今主人光則より賜ひしもの、その薫り餘りに美しければ、せめて

は牢内のつれ〴〵に、これを御身に取らするであらう」

と、盧橘の實を日朗の手に渡して、共にその喜びを頒たうとした。この時日朗は、篤くその厚意を謝し、恭くこれを推し戴ひて、さて、ヂッとその實を見詰めながら

「おゝ、これは御師の日頃好ませ給ふ盧橘の實！」

と、如何にも感に堪ぬものゝ如く

「日朗若し、牢獄の身にしなくば、如何に海山千里を隔つとも、キットこれを捧げて、お悅びのお顏を拜さうものを……」

と、ハラ〳〵と涙を流せば、これを見てゐた彼の牢守も、つく〴〵その憐らしい孝心に感じて、これも密つと涙を拭きながら

「あゝ、遂ひこの某まで、とう〳〵貰ひ泣きいたしました。したが、それも無理のないこと、こういふ身には、何かに付けて師の御房の戀ひ慕はるゝこ

とで御座りませう。何れこの某、又折を見て主人光則にもこのことを歎き訴へ、キッと御身を師の御房に引き會はすやう取り計らふであらう」

と、色々心を盡して慰めた。

それから四五日の後、彼の牢守は、他の牢守と共に、包み切れぬ嬉しさを笑顔に堪えながら、再び牢の窓際近く小腰をかゞめて

「御房よ、喜びたまへ！」

と、先づ吉報を齎したことを知らしめて

「我等兩人、頻りに主人光則に哀願したるところ、主人も殊の外御身の孝心に感じて、快く出牢を承諾してくれました。この上は決して御心配これなきやう、明日にもならば、早々この牢を立ち出でゝ、久しぶりに、師の御房をお訪ねなさるが宜しう御座らう」

「その後は、我等兩人にてキッとお引き受け申せば、必ずともに御身に禍の

掛るやうなことは致しませぬ」

と、萬事を身に引き受けての、二人の嬉しい言葉、日朗は夢かと計り打ち喜び、窓越に兩掌を合はせながら、涙を流して二人を伏し拜んだ。

「方々の御厚意は、日朗死すとも、決して忘却はいたしませぬ。然らば明日と云はず、日朗は是より直ちに旅立ちいたしたう御座りまする」

「それは又餘りに氣短な、空の摸樣もどうやら氣に掛れば、今日の中にすつかり仕度して、明日の朝早くお立ちなさるが宜しう御座らう」

「是から直ぐにお立ちなされても、今日は早や日暮にも間近なれば、途中雪に降られて、今宵一夜を樹の下に休み明かさるゝは必定のこと、それよりはこの牢こそ、却つてお心安う御座りませう」

「色々と御親切なるそのお言葉、日朗は唯だ泣くより外は御座りませぬ。したがどうせ海山千里を隔つ遠い旅なれば、たいひ今宵一夜を惜むとも、何れ

は苦勞を重ぬる我身の上、方々の御厚意に背くは誠に本意ないことながら、何卒この日朗が微衷をも、お察しなされて下されませ」

「すりや、どうしても今からお立ちなさるとお云やるのか？　あゝ御身としてはそれも無理のないこと、然らばこゝを開けまする」

と、錠をはづして、四方に氣を配りながら

「さ、御房よ、早うお出なされませ」

と、聲を低めて覗き込む。

日朗は嬉しさのあまり足さへ地につかず、狂ふが如く、手早く御師よりの御消息と、盧橋の實とを懷中して、傖很として窓の外によろぼひ出た。と、曇つてはゐるものゝ强い晝の光は突き刺す如く目に泌みて、久しく暗い牢の中に馴れた頭に、激しい不意の眩暈を感じた。日朗は倒れんとして僅かに二人の牢守に援けられ、そのまま暫時の間は靜かに窓外の樹の下に身體を休めた。

「遠い旅路を素足では歩行かれませぬ。これは某が履き古した草鞋なれど、どうぞこれをお履き下されませ」

と、一人が草鞋を脱いで勸むれば、一人は手頃の木の枝を折つて來て

「さ、これで杖も出來ました」

と、節々など持よう拂つてくれる。

「あゝ、何から何までの御心盡し、日朗は却つて冥加が盡きまする」

と、日朗は、草鞋を推し戴いてそれを履き、杖を力に漸く立ち上がれば、何かは知らず、嬉しさ悲しさの込み上げて、熱い涙がハラ〳〵と兩の頰を傳つた。

「これは二人が眞んの寸志、甚だ些少のものなれど、途々草鞋などお買ひ下されよ」

と、無理に僅かの路用を持たせ、尙その上、持ち合せた乾飯をも頒け與へて、只管旅情を慰めた。

日朗は幾度か破れた法衣の袖に涙を拭きながら、お禮の言葉も胸に迫つて喉へは出ません、僅かに頭を下げたまゝ、鼻塞らせて聲震はせ

「然らば御兩所、暫くの間お暇を願ひまする。何れ御師の安否さへお訪ね申したなら、一刻も早う立ちもどつて參りまする……」

と、丁寧に會釋すれば

「後のことは、決して御心配これなきやう、隨分ともにお身體をお厭ひなされて、無事師の御房にも對面遊ばされよ」

「あ、どうやら雪が落ちてまゐりました。おゝ冷たい風が吹きまする。この寒空にその薄衣、今宵は何處の木蔭にお宿りなさるやら、お痛はしいことで御座りまする」

と、二人の牢守も、涙がならに別れを惜む。折柄降り來る雪に、三人は空を見上げて暫く無言！

軈て日朗は、涙の目に輕い決心の色を浮べて

「それならば御兩所、これにてお暇いたしまする……」

「おゝ、もうお立ちなさるか。隨分ともに氣を付けて」

「早う、師の御房に御目に掛られよ」

「難有御座りまする……」

嬉しい希望に悲しい別れ、一歩往いては振り返り、振り返つては又進む、痩せ衰へた日朗が姿の、忍びやかに夕暮の雪の中に消えてゆく、その後ろ姿を打ち見やつた二人の牢守は、それから暫くの間、主なき牢の入口に佇んで泣いてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊

佐島配處の積雪

北國の慣ひ、この頃は日毎に大雪打ち續いて、溶くる暇ない塚原の、見渡す限り皚々として、獸さへ通はぬ三昧堂に、大上人は唯だ一人、雪に喉を濕しながら、例もの如く專心經を誦しゆく中、何やらフト降りしきる雪の音に混つて、人聲らしい聲の聞ゆるに、如何にも不思議に思はれて、そのまゝチッと利耳を倚つれば、それらしい聲は再び聞えず、唯だ雪の降り積む音ばかり、幽かに聞ゆるのみであつた。

「この雪中を如何なれば、態々訪ひ來る人があらう」

と、尙も經を續くるうち、不思議や復も微かに聞ゆる人らしい聲！　大上人は痛く打ち驚いて、再び利耳を倚つるに、如何やらその聲は、「御師匠樣」と呼ぶ樣子。

「偖ては遙々この吾を、訪ね來し弟子なるか？」

と、經を收めて立ち上がり、チッと聲する方を打ち見やれば、一面白妙の

雪中を、杖を力に足踏みしめ、轉びつ起きつ躓きつ、此方を指して來る一つの黑い人影！

「御師匠樣――ッ！」

と、聲を限りに叫んでは、時々杖を休めて、當もなく四方を見廻してゐる物哀れさ！　大上人は思はず柱を抱いて延び上がり

「お――いッ！」

と、これも聲を限りに呼び交せば、その聲の、降る雪を通して聞えてか黑い影は急に元氣づき

「御師匠樣――ッ！」

と、復もや聲を限りに呼び交しつ、段々聲を力に雪を侵しながら、草庵目掛けて近づいてくる。

漸くのこと、庵の前に近づいた、その憐らしい人影を、雪を透かしてチッ

と打ち凝視れば、こはそも如何に鎌倉の、土の牢屋に居るべき筈の弟子日朗！

大上人は思はず喫驚して

「おゝ、和殿はあの日朗！」

と、我を忘れて縁より飛び下り、雪を蹴立て、二三歩前へ近寄れば、日朗

聲を震はしながら、

「あゝ御師には、御無事にて在せしか、あら難有や南無妙法……」

と、これも二三歩前へ摺り寄つて、そのまゝ御師の足下に跪きつ、シツカ

と法衣の袖に打ちすがり、

「あゝ、お懐しう御座りまする！」

と、涙に咽ぶ顔を上げ、つく〴〵と御師の顔を見奉れば、大上人もその憐ら

しい姿に胸つぶれ、熱い涙をハラ〳〵と滾して

「おゝ、和殿も無事でありしよな、懐しう思ふぞよ！」

と、後は云ひ得ず日朗を、シツカと強く抱き締めて、無言のまゝに見下せ

ば、あゝ面痩れしたその顔貌！　色は蒼ざめ頰は痩け、垢にまみれし頭髪は

延びて、荊の如く振りかゝる、あはれ替つたその姿！　大上人はせきくる涙

をヂツと堪えて

「してこの遠い旅路をば、何か用ばし候てか？」

と云はれて日朗懐中より、例の盧橘の實を取り出して

「これは先つ日、牢守より日朗の賜ひしもの、御師の日頃好ませ給ふものな

れば、爭かしてこの實をば、捧げまつらん所存にて、態々これまで持てま

ゐりました。

「おゝ、この盧橘の實を！……」

「はい、そして安否の程も承りたく……」

「あゝ、いつに變らぬ和殿の孝心！　日蓮嬉しう思ふぞよ」

「えゝ、勿體ないそのお言葉、日朗も麗しいお顏を拜して、こんな嬉しい事は御座りませぬ」

雪はしづ心なく、チラ〳〵と泣き交はす二人の上に降つてゐる——

軈て日朗は、涙ながらに其後に於ける御師の御樣子など聞きまゐらせ、又自らの身の上に就ても、御師よりの御消息から、二人の牢守の同情、奉行光則の歸依に至るまで、一什始終を聞え上げ、その終りに涙に曇る目を揚げて、いと嬉し氣に御師の顏を差し覗き

「こういふ四圍の事情なれば、日朗が身は少しも氣煩ひ御座りませぬ。どうぞこのまゝ、暫時の間御側に置いて下されませ」

と、云へば大上人サッと抱いてゐた手を放して

「そのやうなこと云ふて、この日蓮を泣かさぬものぞ。我とてもこの雪中に、たゞ一人の友さへ無き身なれば、和殿を置きたきは山々なれど、我は流罪和殿は監禁、何れも同じ罪の身の上、さるを私の情けから、師弟諸共、國の掟を破つたと聞えては、一つには、法華經へ傷をつけ、二つには却つて我等が身を破るの道理、經には現世安穩とこそ說かれて候へば爭でか後日の對面叶はざるべき、それまでは隨分ともに氣を附けて、法の爲めその身を大切にせよ」

と、涙を隱して喩し給へば、日朗はヨ、と計りに泣き伏しながら

「あゝ情ないそのお言葉、こうして海山隔つ旅路をば、一人苦勞を重ねつゝ、これまで推參なしたるも、唯だ〳〵御師のお側に暫くなりと、お給使申さん心のみ。日朗は、返す〳〵も恨めしう御座りまする……」

と、雪に顏を埋めたまゝ、身を震はして怨じ悶ゆるのであつた。

「さ、その怨みは道理ながら、今和殿も云ふた通り、遠い旅路を苦勞して、折角こゝまで來たものを、假令誤られたる罪人にせよ、法華經のため、國の掟を守らんとて、堂にさへ上げ得ぬこの身の苦衷！　少しは推了ばし候へよ」

と、再び日朗の手を取れば、日朗はその手を御師の手に任せたまゝ

「すりやあの、お堂にさへ上げ得ぬと仰せられまするか？」

「オヽ、これも況滅度後の吾等が責務、返〳〵も情ない師匠と怨みそよ」

と、云へば、日朗は唯だ悲しさに慨歎るばかり、雪は益々二人の上に降りしきつてくる——

やゝあつて日朗は、泣き腫した眼を揚げて、悲しげに夕暮近い四方の景色を打ち眺めつゝ、懐中より一通の卷文を取り出して

「これは先つ日、御師の依智より賜ひし御消息、この中にも、法華經を身に讀み候ことの、仲々に尊き由聞えたるを、今身に當つて熟々と思ひ知ることが出來ました。然るにそれをも知らず、一時の別を惜んで御師をお怨み申したは日朗が不覺、何卒お許しなされて下さりませ」

と、恭く卷文を推し頂き

「再びお目もじ叶ふまでは、この御消息こそ、日朗が身に取つては、又ない御師匠様に御座りまする」

と、涙ながらに又其を懐中すれば、

「オヽ、得心なまゐりしか？！」

と、大上人は却つて日朗が憐らしい心に、悲しい思ひを忍びながら、これも漸く四邊に迫り來る夕暮の色を見廻はしつゝ

「あゝ、早や心急かるゝ黄昏時、今宵一夜、和殿を茲に泊めたとあつては、自ら公儀の掟を破るも同様……和殿はこれより戻りやるか？」

と、云へば日朗、熱い涙をハラハラと滾して

「あゝ甲斐ない我身のために、色々の御心づかひ、日朗はこれにてお暇いたしまする……」

と、力なく雪に埋みし杖を拾ひ上れば、大上人は其優しい言葉に胸塞がり、

佐島配處の積雪

ット再び日朗が身を抱き締て

「法の爲め、隨分ともにその身を大切にせよ！」

と、炎る情けの罩る目に、ヂッと日朗の顔を打ち見戍れば

「……」

日朗は唯だ言葉もなく、涙ながらに御師の胸に顔さし付けて、いつまでも

獻歎るのであつた。

日朗が涙の眼に、後見返り〳〵、孤影悄然として、雪と暮色との中に呑まれ去つたのは、それから暫時たつてからのことであつた。大上人は一人淋しい雪の海原に、いつまでもその後姿を見送つてゐた。

二日昭上人

▲本化地涌の殿將軍

建長五年の秋も暮れて、木々の梢に漸く冬枯れの寂しさを思はせる或日の夕暮方、突然松葉ヶ谷の御庵室に聖人を訪れた一人の旅僧がある。

「御免下さりませう」

云ふ聲は何處となく落着いて重々しい。

「誰方に御座りまする、御遠慮無う……」

經文に目を曝されてゐた聖人は、かう答へながら靜かに立つて上り框の障子を開けられた。見れば左手に小さな荷物を抱へ、右手に古びた檜の笠を持つた一人の旅僧、長途の旅に稍〻疲れたらしいその顔にも、何處か賤しから

ぬ風格を備へて、目に何か熱心な希望の色を示している。

旅僧は襟を正しながら、

「貧道は叡山の學生成辨と申しまする未熟者、失禮ながら御房は日蓮上人に御座りまするか」

「如何にも拙者は日蓮と申す者、して何用あつてお訪ねなされしや」

「實は貧道所以あつて先つ日叡山を下り、如何にもして聖人に御目に懸つて色々御示教の程相仰ぎ度く、遙々これまでお訪ね申せし次第に御座りまする」

「それは又奇特なお志、日蓮知れる丈けは何なりともお話申し上ぐべければ、先づ〳〵上へ上がつて休息せられよ」

懇ろに言はるゝまゝ、旅僧は嬉しさに早や目を霑ませながら、上へ上がつて静かに疲れた膝を折り、改めて慇懃に聖人を三禮して偖云ふやう、

「突然のお訪ね、折角御法門の御邪魔を申上げ、何とも恐縮に存じ奉りま

す」

「否々、その御遠慮には及ばぬこと、何れは法門の爲めなれば、御尊來の程日蓮うれしう思ひまする」

「然らば御言葉に甘え、成辨が身の上一應聞え上ぐるで御座りませう」

と、それより彼の語ることろによれば、彼は十四歳の時甫めて郡の山寺に入つて髪を毀ち、次で叡山に遊學して一時の英傑尊海法印に親炙し、漸次教家百家の群書を渉獵して終には天台の三大部を讀み、又傳教大師の秀句守護章等の書を通覽して面授口決の進むこと恰も飛ぶが如く、十八歳の春愈〻壇に登つて戒を受け、それよりは專念慈覺智證の書に眼を曝して倦むことなく、學解益〻圓熟して優に一山の重鎮を以つて目さるゝに至つた。

然るに彼が覺證の書を讀む毎に常に不審に囚はれたのは、即ち彼等の力説する法華大日理同事勝の説であつた。彼は餘りの不審さに幾度も〳〵も讀み

返へしてはその研究を重ねたが、研究すればする程群疑腸に滿ち衆難胸に塞つて、益〻その去就に迷ふの有樣、彼は遂に卷を覆うて長太息し、思はず「獅子身中の蟲」と叫んで、言々句々敎大師の眞意に戻る彼等の說を否定した。

或日彼は巧みに問を設けて密かに之を法印に質した。法印は驚愕の目を睜りながら熟〻彼の顏を打ち眺めて

「汝は定めし蓮長が流を汲む者であらう」

と云ふ意外の言葉に

「其蓮長とは誰人なるや、成辨は少しも知ませぬ」

と云へば、法印は却つて不審の眉をひそめながら

「さればなり、曾て我が故友に蓮長なる者あつて山上久しく年を閱し、修學漸く力を得て規模宏大に、志念深遠にして頗る凌雲の氣に富んで居たが、唯だ覺證の義を破することを知つていまだ敎大師の密意を知らず、動〻もすれ

ば「四十餘年未顯眞實」の文を引いて問難を構へ、遂に衆〻議合はずしてそのまゝ山を下つてしまつたが、今汝の言ふところ暗に蓮長の義と符節を合してゐると云ふことは、如何にも不審である」

とその暗合を疑はれた。

「然らば其蓮長とやらは唯今何處に居れられまする」

「噂に聞けば其後名を日蓮と改め、唯今鎌倉邊に徘徊して、頻に傳敎宗を弘めて居るとのことである」

と云ふ話に彼は法悅の情やる方なく、人々にはそれとなく暇を告げて山を下り、唯だ日蓮といふ名をしるべとして、終に遙々この鎌倉まで長い旅路を重ねて來たのである。

聖人は始終の話を聞き終つて、計らずも同行の善知識を得たるを喜び、

「承れば如何にも不思議な我等兩人、これ併しながら奇しき宿世の因緣と

本化地涌の殿將軍

いふもの、見苦しくはあれど暫く此庵に錫を留めて、共に本地の奥藏を叩かれよ」

といへば成辨嬉しさ身に餘つて

「有難いそのお言葉、何卒お側に召し使はれて、御示敎の程賜るやう、お願ひ申し上げまする」

と初めて安心して、庵の片隅に漸くその旅裝を解いたのである。

抑〻成辨は總の下州葛飾ノ郡平賀ノ鄕に生れて、その父を畠山祐昭と云ふ。一姉妙一優婆夷は卽ち日朗の母であつて印東有國に嫁し、小弟某は長子たる彼が出家の後を襲うて家にその箕業を繼いでゐた。成辨人と爲り幼にして矜嚴、厚く禮を好んで擧止自ら節に叶ひ、常に書を續んで倦むことなく、宿因の感ずるところ深く三寶を敬ひ、時に獨り幽室に坐して靜かに經を讀むことも稀しくはなかつた。父母之を知つて終に彼が出家の志願を容れ、建長五年彼が

年齡漸く十四歲の時、之を郡の山寺に送つて初めてその志を果さしめた。彼はそれより叡山に上つて螢雪の功を積むこと前後二十年、止暇斷眠の修學漸くその功を卒へて天機玆に秀發し、計らずも法華大日理同事勝の說に到つて衆とその議合はず、遂にそのまゝ山を下つて遙々鎌倉の地に唯一人たる先覺者の後を追うてその庵室を叩いたのである。

成辨が松葉ヶ谷の庵室に掛錫を許されてより、間もなく世は甲寅の春を迎へた或日のこと、聖人は孜々として側らに勉强してゐる成辨を顧みて、試に難問數個條を設けて之に答へしめた。然るに成辨は聖人に隨侍すること既に數箇月、略〻本化の法門にも達し居ることなれば此等の質疑に對しても何等躊躇するところなく、直ちに明快なる解答を申上げて聖人の意を滿したことがある。此時聖人は優賞の餘り智辯第一の讃辭を賜ひ、特に大の字を授けて大成辯と呼ばれ、次で彼が親に孝なるところより父祐昭の一字を取つて名

本化地涌の殿將軍

を日昭と改めさせた。以後彼は聖人の數ある御弟子の中にも常に法兄の位置を保ち、聖人よりも特に辨殿の敬稱を以つて呼ばれてゐたのである。

聖人の折伏は日昭を得て益〻激しくなつた。假令自分は法戰に仆るゝとも、既に自分の後を襲うて二陣三陣續ぐべき法嗣を得たからである。けれども折伏の激くなるに隨つて怨嫉も亦其度を增して來た。正嘉二年聖人偶〻慈父妙日居士の喪に遭うて桑梓に往かんとする時、諸弟子切りに法衣の袖を捉へて諫めて言ふやう、

「方今御師を憎む者稻麻竹葦も啻ならざる折柄、如何に父君の喪に遭ひたればとて、長途の御旅程必ずや途に危害を加へられぬとも限りませぬ。彼の地へは何卒然るべき者をお遣し下されて、御師にはこのまゝ鎌倉に御止り下さるやう偏へにお願申し上げまする」

聖人は師を思ふ一同の情をうれしく思ひながらも

「孝は百行の本、佛說いて戒の本と遊ばされたる以上、日蓮如何なることありとも、之を忽にすることは出來ぬ。したが日蓮若し不幸にして途中一命を失ふこともあらば、その時は日昭こそ我に代つて各々を導くことであらう」

と先づ彼等の心を慰め、次に親しく日昭を召して容姿を改め

「吾今子に告ぐるに一大事因緣を以てすべし。至信に聽受せられよ。時既に末法に入つて二百有餘年、經文の如くならば上行菩薩此土に應現して法華經を弘めさせ給ふべきに未だ見えさせ給はず。然るに日蓮不肖なれども虛空會上別に塔中付屬の眞印を帶びて不輕の跡を偲ぶこと玆に幾歲。奇なるかな如來の讖文、僅かに妙法五字を弘むるに三類の强敵忽ち競ひ起つて惡口刀杖至らざるなきこと、實に勸持の敎文こそ日蓮が爲めには不思議の經文と言はねばならぬ。されど又則遺變化人の經文憑みあれば、たとひ我父の喪に赴くとも、途中別條無きは必定、然るに諸弟子我身を思うて切りに我が行を止む。

故に我今子を累して補處の位に充つべし。子幸ひに日蓮が跡を繼承して慳悋を生ずること勿れ」

と、乃ち日昭の至心に合掌低頭してよく命に聞きたるを見て、聖人は驚て旅裝を整へて遂に父の喪に赴かれたのである。日昭はその間能く艸堂を守つて一家章疏の講習に餘念なく、專心人々の教養に力を盡して、少しも補處の榮位を辱かしむるところ無かつた。されば聖人が伊東、東條、龍口、佐渡、四難の時も日昭は一度もこれに隨はず、常に鎌倉にあつて人々の離散を防いでゐた。

文應元年庚申の歳、庵室は一夜敵火の爲めに燒かれて、聖人は僅かに身を持つて、富木五郎に援けを得たる時、日昭は嘗の約束を忘れず、再び艸堂を起して聖人を迎ふると共に、一方直に人々を收集して遂に離散の運命を防いだのである。

後文永八年辛未の秋九月、聖人復た阨に遭うて龍口の刑場に座した時、折角の艸堂は再び毀たれて日朗日心は獄に下され、朋黨悉く辱を蒙つて遂に府内を逐はるゝもの二百六十餘人の多きに達したことがある。此時日昭は終日一飯を得ず連夜一宿をも得ざる辛苦を重ねて漸く跡を晦まし、更に名を代へ形を變じて僅かに濱土の側に廬を結び、以つて密かに時の至るを俟つてゐた。幾何ならざるに人々は果して彼を信賴して其會下に集まり、第二の聖人として至心にその命に服してゐたのである。

文永十一年甲戌の歳、聖人漸く嘉運を開いて佐渡より鎌倉に歸り、多くの弟子壇越に迎へられて夷堂に入られた時、日昭は恭く之を出迎へて階に法勞を語り、佛讖の虛しからざることを歎じて法門の萬歳を祝した。此時聖人は眼に涙を堪へながら堅く日昭の手を握つて

「日蓮末法に法柄を執つて幸ひに佛勅を辱しめず、具さに勸持の偈文を色讀

本化地涌の殿將軍

し終りしこと、何とも喜びに堪へざる次第、さりながら日蓮中頃盛んに權實二教の戰を起して法敵と戰ふに、初心の弟子は心平かなることを得ずして動もすれば憶想妄見の網の中に墮し、自らこの良緣を失はんと其去就に迷ふの時、子身心動せざること恰も須彌山の如く、又能く人をしても動せしめず、常に殿軍に將として後顧の憂ひなからしめたる功、眞に大なりといふ可きである。日蓮今幸ひに所願既に滿足するも、これ日蓮一人の功德に非ず、全く子が輔佐の功德に俟つものと云はねばならぬ。」

と云へば日昭も亦涙ながらに

「折角御師が身命をも惜み給はず、折伏の大化を布いて逆衆の中に刀杖を加へらるゝ時にも、日昭は常に隨從し參らせず、徒らに爲すこともなく鎌倉の地にふみ止り居りましたること、思へば冥加恐しう覺えまする」

と身を遜してその言葉を謝し、それより互に一同の無事を祝して積る話に

本化地涌の殿將軍

賑かな一夜を明した。

聖人が三度君を諫めて聞かれず、古賢の例に習つて跡を身延に晦されようとする時、聖人は覗しく日昭を膝下に召して、長與山に主たらしむべく慫慂した。けれども日昭は固くこれを辭して

「御師若し此地を去り給はゞ、三類の徒必ず時を得て競ひ起り、隙を伺うて謀を廻らし、名を宗論に假つて暴威を逞ふするやも計られませぬ。身不肖なりと雖も矛を枕にして法陣を此地に期するの覺悟、何卒此儀宜しう御賢察下されたし」

と遂に之を日朗に讓つて起たず、聖人御隱退の後は身延にも隨從せず、獨りその跡を晦して濱に潛み、深く三類を慮つて專念護法の大任を身に引き受けてゐた。それより前後九箇年の間日昭は一度も門を出でず、弘安五年聖人池上に示寂の時、初めて其影を門外に現したといふことである。

本化地涌の殿將軍

十月十日、愈〻入滅の期の近づきたるを知し召されたる聖人は、枕頭に日昭を召して具さに滅後の大事を囑して後、手づから手書の註法華經開結十卷、法華三部の要文三卷、本理大綱集一卷を授け、日蓮一期の奥義末法萬年の規矩、悉く此等の卷に集まることを告げ、更に肉齒二枚親しく之を授けて、我亡き後宜しく對顏の思をなすべしと命じ、筆を加へて共に之を日昭に賜つた。其文に曰く

這の齒牙所在の處日蓮現在前す。其地佛法繁盛せん。宜しく一家の珍となすべし。

弘安五年十月十日　日蓮　花押

十三日聖人の御入滅より、翌年正月二十三日の喪を終る迄、日昭は日朗と謀つて總ての佛事を監督し、喪終るや身延淸規を作つて月次輪番の制を定め、十月には長榮山に一同の弟子檀那を會めて聖人の御遺文百四十餘篇を編

輯し、大略滅後の大事を終つて、それよりは再び影を潛めて濱土に幽居し玆に心喪を盡すこと四十餘年、元亨三年癸亥の春三月、終に壽百三歳を以て化を他界に遷されたのである。

嗚呼日昭の一生こそ、眞に本化殿將軍の名を辱しめぬものといふべきである。その初め一蓑一笠に身を託して松葉ヶ谷に聖人を訪問してより以來、常に補處の重位を保つては聖人をして嘗て後顧の憂ひなからしめ、滅後には又遺命を奉じて大略聖人の後事を纒め、終に世を終るまで裏面の人としてその努力を惜まなかつたといふ事は、如何にその心事の尊く且つ嚴かに見ゆることであろう。吾等は聖人の奮鬪を思ふ毎に、常にその影にかくれて之を助けてゐた日昭のあることを忘てはならぬ。

三日朗上人

▲由井ケ濱邊の唐紅

弘長元年五月十二日！鎌倉琵琶の小路の四ツ辻に、今日も亦朝まだきより、折伏逆化の鋒尖鋭く、念佛は無間よ禪は天魔と、大聲叱呼して道行く人人を驚かせてゐた日蓮聖人は、この時あはれ説法の眞最中、突如北條重時の子長時等が爲めに召し捕はれて、何等問注所の吟味も遂げず、そのまゝ由井ケ濱邊に引き行かれて、遂に一艘の小船に移し乘せられてしまつた。是非を問ふ暇もなく、聖人は寂しい伊豆の伊東に流されて行くのである。

かくと聞くより、名越の御菴室よりは日興等を始めとして、その外多くの御弟子衆、荏原池上進士等の檀越は道にて之を傳へ聞き、スワこそ御師の一

大事と、取るものも取りあえず、急ぎ由井ケ濱邊に聚り來て見れば、早や嚴重の囚人として、番の兵士等、仲々に人を近寄せず、棒など打ち振りつゝ、此方を睨め廻して、頻りに罵り喚いてゐる。――とこの時日朗はかくとも知らず、比企ケ谷に在つて、御師の上を案じ煩ひつゝも、只管思ひを單めて法門に心を碎いてゐた折柄、道行く人々の話にフト耳を欹つれば、こは如何に、御師には囚人の身となつて、直に由井ケ濱より伊豆の伊東へ御流罪と云ふ。

「日朗もお供仕ります。キットお供を仕ります」

せき來る涙に目も霞みて、草履さへ穿く暇もなく、徒ち跣のまゝ、轉ぶが如く由井ケ濱邊に駈け來つて、チッと彼方を打ち見遣れば、御船は今や出やうとするところ。日朗は狂氣の如く走り寄つて、渚近くに亂れ泣く同門の人々に會釋する暇もなく、今年十九の纖弱き腕に、シッカと纜を引き止めて

「我は流人日蓮が弟子の日朗といふもの、願くはこの身をも、共に同船得させて給はれ」

と、聲を限りに泣き叫べば、情を知らぬ官人は、怒りに震ふ聲荒らげ

「己れ憎き青道心！そも此船を何とか心得る。狼藉すな、御用船なるわ」

と、櫂振り上げて目を瞋らす。

「あゝ、情なきそのお言葉、御用船なること、日朗疾うに承知せり。されど

开を曲げて、この日朗をも、一緒に流して給はれかし」

と、言ふをも候たず

「えゝ小五月繩い、言はして置けば公威を蔑る、剛情我慢の日蓮が弟子、聞く耳持たぬわ、そこ放せ！」と、尙も一ト振り櫂打ち揚げ「放ずば、コレこの通り、性根を付けて呉やうぞ！」

と、ハッシと計り打ち下せば、日朗は目も暗みて、一聲アッと叫びつゝ、

そのまゝ動と倒れ伏す、刀杖瓦石の法の難！見れば綱に縋りし日朗の、右の腕は二つに折られて、あはれ時ならぬ血潮は、由井ケ濱邊の砂を紅く染むるのであつた。

この時師の聖人は、堪えやらずして船梁に立ち揚り、偖、左右の官人を顧て宣ふやう

「彼は幼少の時より我弟子にして、暫くも側を離れず給仕せし不便の者、願くは一言の暇を告げ得させよ」

と、慇懃に會釋して、軈て此方に打ち向はせられ

「やよ日朗！日朗！」

と、御聲高く喚び活け給へば、その慕はしき御聲の耳に入りてか、夢見る心地に半死の日朗フト起き上がらんとして兩手を支へば、あはれや身は忽ち力を失つて、右方に又も轉び伏すのであつた。

由井ヶ濱邊の唐紅

餘りの不便さに、聖人も流石に涙に曇る聲うち上げ

「日朗！やよ日朗！」

と、再び强く喚び給ふに、痛はしき夢のやゝ醒めて、不審の顏に起き上がり、聲する方をヂット見やれば、懐しや舷頭に立つ御師の姿！

「あゝ御師には、未だ此處におはせしか、御船は未だ出でざりしよな、あら嬉しや、南無妙法蓮華經！」

と、合す掌も、右は折られて片腕、揚げて泣き入る悲痛の血涙！

聖人も、法衣の袖に涙を推し拭つて

「如何に日朗、日頃の教化を忘れたるよな。これ程の喜びをば何故に泣く。今末法に生れてこの法華經を弘むるならば、三類の强敵踵を接して競ひ起り、惡口罵詈、及刀杖は申すに及ばず、數々擯出せられて流罪にも遇ふべき由は、法華經勸持品の中に說き置かれたる金口の明文にあらずや。喜ばしいか

由井ヶ濱邊の唐紅

な、佛の滅後二千二百有餘年、末法五濁の今日只今、汝は刀杖に血を流し、我は伊東に流罪の身となる。如來の讖文違はぬ上は、廣宣流布も疑なし。假令われ、遠く八重の潮路を流されゆくとも、天諸童子以爲給仕の經文虛しからずば、日蓮が身に別の事はあるべからず。軈て赦免の時を得て、再び廻り逢ふまでは、法の爲めその身を大切にせよ。此地と伊東とは、西と東に別るるとも、心だに同じ法華經の心ならば、居も亦同じ理なり。返す〳〵も弱き振舞あるべからず。日蓮明日より配處に漂泊の身となるとも、東天遙かに旭日の登るを見ば、日朗鎌倉に恙なしと知るべし。若し日の西山に傾くを見る時は、日蓮伊東に無事なりと思はれよ」

と、いひつゝ靜かに御目を閉ぢ、數珠おし揉みながら合掌し給へば、日朗は、今は悲みの極に達して、

「あゝ難有きそのお言葉！日朗生々世々決して忘れは致しませぬ。甲斐なき

日朗が身を、それ程迄に思し召す、御師の深い情けこそ、却つて冥加恐ろしふ覺えまする」

と、言はふとしたが、喉は嗄れて聲も出でず。唯だ歔欷げては身を悶ゆるのみであつた。

「えゝ何時までも吠え失せる。それ程別れがつらいなら、何故に諸宗を惡口するのぢや。この阿彌陀如來の罰當り奴が！」

と、いゝつゝ例の官人は、復もや寄り添つて日朗をハツタと睨み

「そこ去けえ、ハヤ去かぬかッ！」

と、土足のまゝ、日朗を打ち倒して、一方舟子に早々出船すべしと嚴命した。

聖人は、この時聲いと嚴かに

「さらばなり、日朗！」

と、僅かに名殘の言葉を惜み給ふに、心なき船はハヤ舳を廻らして、靜々

と動き初むるのであつた。

「あゝ御師には最早や御出船！思へばこの日朗こそ、お伴さへ叶はぬ身の不孝！返〳〵も口惜うゑまする」

と、身を慄して立ち上ッた日朗は、目から瀧なす涙をハラ〳〵と流して

『則遣變化人、爲之作衞獲』

と、お經の文を唱上げ、後見送つゝ、御師の影を伏し拜めば、御船よりは

『此經難持、若暫持者、我卽歡喜　諸佛亦然――』

と、波の間に〳〵聞えくる寶塔品の偈文、一句は揚り一句は沈み、一句は伸び一句は縮んで、咽ぶが如く笑ふが如く、渚に泣き入る日朗の耳朶を掠めて、御師の影は段々小さく遠かつて行つた。

あゝこの光景を見て、誰か泣かぬものがあらう。磯邊に居並ぶ弟子檀越は勿論のこと、信男信女の人々に至まで、悉く涙の袖を絞たのである。

四富木五郎胤繼

▲外護扶宗の大檀那

今し下總二子の濱の海邊を離れゆく一艘の高樓造りの御座船がある。船には紅白吹貫の船印美しく、水色に桔梗の紋の幔幕を打ち廻して、水子楫取には皆一樣の扮裝に陣笠を着けしめ、折から吹きくる地風に送られながら、櫓拍子ゆるやかに沖合指して漕いでゆく――と今乘り棄てたばかりの岸邊に立つて、突然背後より船を呼んでゐる一人の旅僧がある

「お――い、お――い……」

頻りに法衣の袖を潮風に吹かせながら、右手に高く檜の笠を振り翳して呼んでゐる。

船の中には富木五郎、早くもその樣を見て左右を顧み、

「おゝ、何れの旅僧か頻りに船を呼んでゐる。幸ひ船中も無聊なれば、つれづれの話對手に興もあらう。苦しうない、これへ得させよ」

との言葉、近侍の武士は早速水子に吩咐けて一艇の小艇を下ろし、再び岸邊に漕ぎ返して、彼の旅僧を船中に迎えしめた。見れば歳はまだ三十二三の血氣の若僧、身に墨染めの旅衣をこそ纏へ、眼光澄み渡つて眉秀で、額廣く頰豐かに、自然に備はる威風は四圍を拂つて自づと人を引きつける。

「如何なる身分の僧であらう……」と五郎は心の中に思ひながら、やゝ威儀を直して控えてゐる。旅僧も亦チラと五郎の顏を見て、その風格の凡にあらず、凛乎たる氣性の眉宇の間に現はれて、悠揚迫らざるその態度に少からず敬虔の情を起し、

「あゝ、聞きしに勝る立派な殿振り……」

とこれも亦心の中に思ひながら、軈て座を正して兩手をつかへた。

「先程は無躾ながら御船をお呼び申したるに、何のお咎めもなく態々お迎えまで蒙り、何ともお禮の申しやうも御座りませぬ」

と先づ先程の無禮を謝し、更に言葉を改めて

「拙僧は嘗て南都遊學中一方ならぬ御高恩を蒙りました日蓮に御座りまする。殿には初めての見參、お懐しう存じまする」

と云へば五郎も初めて驚異の目を柔げ

「おゝ、汝が日蓮であつたか?!」

と直が繋がる緣の情、湧きくる嬉しさを兩の頰に現はして

「して、何用あつて當地に參しか?」

「實は拙僧、初めての見參かた〴〵今迄一方ならぬ御高恩を蒙りましたその御禮をも申上げ、旦つは遊學中色々感ぜしこともこれあれば、合せてそれら

のことをも聞え上げたく、態々鎌倉より當地をお訪ね申したるところ、生憎殿には公務のために、つい一刻先きに鎌倉へお上りとのこと、それ故お邸には早々にお暇を告げ、そのまゝ急ぎこうしてお後を慕ふて參りました」

「おゝ、それは又奇特な志、五郎嬉しう思ふぞよ」

と云ひは云つたが五郎胤繼、何思つたか忽ち氣色を變へて屹となり

「したが日蓮――」と一際膝を進ませて「如何に其方天魔破旬の身に入りしか、去年南都の業を卒へて古郷安房に歸り、父母の國をも打ち忘れて開口第一、先づ念佛は無間禪は天魔と、杓を叩いて清澄の山上に慟語し、終に地頭の怒りにふれて山を追はれ、そのまゝ更に鎌倉に上つて今尙盛んに諸宗を惡口なしをる由、噂に慥と聞き及びしが、よう考へても見よ、この永の年月衣食を送つて、誰がそのやうな性根の惡い無道心を養ひ立てんとはせしものぞ、太田殿にもせよこの五郎にもせよ、我が數少き緣者より出た一人の出家、ど

外護扶宗の大檀那

うぞ行末天晴なる名僧智識にもと望を嘱したればこそ、こうして今迄貢いでも來たのである。それを何ぞや未だ業の卒るか卒らぬに、少しばかりの法門を鼻にかけ、父母や縁者の顔に泥を塗つてまで、諸宗に向つていらざる悪口立て――いつか汝を呼び寄せて、それらの事どもシッかと云ひ懲さんと思ひしが、繁き公務に支へられて、そのまゝ今日まで過せしところ、今計らずも此處で汝に逢ふとは天の配采、いざ我面前に於て諸宗を悪口しても見よ、不憫なれど一殺多生の慈悲なれば、有無なくソッ頸即座に切り呉れん、やよ日蓮、返答如何に？」

と早や刀の柄に手をかける。上人は心中豫ねて期したることなれば、この不意の出來事にも少しも騒がず

「あいや殿には何故の御短慮、暫くお俟ち下たれたし」

と珠數持つ右の手に之を制して、偖言葉を改め

「法のため、何れは捨つる命なれば今茲に殿の及にかゝつて仆るゝとも露口惜しとは思ひませぬが、高恩ある殿に折角の法門を一言も申し出さずして、このまゝ相果つることのありましては、却つて殿に不知恩の者ともなります る。それ故今日蓮、試に――と申しては甚だ失禮なれど、あら〳〵法門一通聞え上ますれば、何卒暫くの御猶豫をお願申まする」

と更に襟を正して座を進め

「殿の信仰深き比叡山を例に取るもさることながら、早い話が慈覺大師の邪流の法門、あれこそ妃の腹に卑夫の種子を孕みたるやうに、法華と眞言とを習ひ合せて法華經を汚し、その上この法門佛の御心に叶ふや如何にと、佛前に七日の間祈誓を凝しその五日目の夜寅の時、日輪を的として箭を放ち、弦音高く終に日天子を射落しなうと夢に見て、さては我法佛意に的中したるかと打ち喜び、そのまゝその宗を弘めしもの、卽ち今の似而非天台の起りにて

候ぞ。昔須跋陀羅は日の落るを夢に見て、佛の御入滅の近きを知り、又唐土の桀王は日に向つて箭を放ちしため、終にその國を亡ぼしたる例も候ものを、況してや佛の御名をば日種と呼び、我國の名をば日の本と云ふ、その日に向つて箭をはげし、慈覺大師はよも正氣にては在すまじ、定めし法華經の金言の如んば、惡鬼入其身の邪師なりしや、疑なきことで御座りませう」

とそれより法華と眞言との勝劣七重の相異あることを精しく物語つて第一法華經、第二涅槃經、第三無量義經、第四華嚴經、第五般若經、第六蘇悉地經、第七大日經と示し、偖最後に眞言亡國の法理をも合せて聞え上げ、一々經文の明鏡にかけてその誤謬を匡した處、五郎は握りし拳もいつしか緩んで、宿因忽ち薫發し、心の底より湧き來る懺悔の涙に目を濕ませながら、プツと手に持つ眞言の珠數を斷ち切つて

「あゝ先程より段々の法談、五郎恰も無明の夢より覺たる心地がする。如何にも御身の云はるゝ如く、定めし天台眞言の邪法なることも必定であらう。この上は五郎身に代えても必ず法華經を信じ、行末御身の弘通を援けることであらう。返すゞも今の粗忽は惡しう思ひそよ」

と只管上人に今迄の粗忽を詫びて卽座に法華經無二の信者となり、以後永く上人外護の大檀那となつたのである。

かくて船は海上いと靜かに、それより三時餘にて武州久良岐郡六浦の濱に着いた。上人及び五郎は茲に再會を期して暫く惜しい別れを右と左に告げたのである。

五郎は元と源氏を姓として、代々因州富木（或は富城）の鄕に食んでゐた。資性果斷に富んで才氣橫溢、屢〻軍功を顯はして雄武の譽高く、常に時君のために敬異せられて特に富木を以つて呼ばれてゐた。それが爲め終に自らも富木を以つて姓とするに至つたのである。後下總の國葛飾郡八幡の庄若宮の

邑に移つて、以來改めて茲に祿を管することとなつた。

五郎一度び上人と船中に相見るや宿緣の誘ふところ、翻然として捨邪歸正し、それより鎌倉直參の折、官仕の暇を見ては時々松葉ヶ谷の御庵室に上人を訪ねて、本化の大法にその心田の妙種を培養し、一々上人指南の下に古今の經論釋疏を涉獵して行くとして通曉せざるなく、忽ちに權實の起盡、本迹の闇奧を究め盡して、胸中廓如として朗然たる本地の光風に歸るの思ひがあつた。

文應元年庚申の秋、近年頻りに打ち續く天變地夭に鑑みて、上人は茲に立正安國論なるもの一卷を作つて之を前執權北條時賴に捧げた。そしてこれ皆念禪眞言等の邪法天下に彌蔓して、法華正法の惠日を覆ふ爲めなりと絕叫したところ、如來の讖文空しからず、三類の强敵忽ちに蜂起して、御庵室は一夜深更、終に敵火の爲めに燒き棄てらるゝに至つた。この時上人は僅かに身を以つて山中に遁れ、折よく丁度そこへ尋ね合はせたる五郎の從者に身を託してそのまゝ中山の地に遠く落ち延びてしまはれたのである。窃かに上人を迎え得た五郎は、深く上人の無事を喜んで、何くれとなく上人を勞り援け、尊敬日頃に百倍して、終に邸搆の中に法華堂を營み、茲に日々の法筵を請ふて家族全體は勿論のこと、太田左衞門乘明、曾谷敎信、秋元太郎兵衞等の親族は更なり、鐘阿彌等近隣の老若男女に至るまで、悉く之を改宗せしめて、其にその法益を頒つたのである。上人は思はず此處に日數を重ぬること丁度百日餘り、其の間說法の暇を見ては態々五郎の爲めに手づから一尊四菩薩の像を刻し、又寶塔品の說相に從つて大小の二幀を畫いて之を授けられた。

今朝しも見渡す峯の木枯吹き絕て、霜冴え渡る庭傳ひ、五郎は如何にも晴やかなる顏に包み切れぬ法悅の微笑を堪えながら、靜に法華堂へ入り來つて「優曇華の花咲き匂ふ千歲の一時、御說法も早や昨日にて百座に滿ちまして、

こんな嬉しいことは御座りませぬ。幸ひ鎌倉名越の御庵室も、その後番匠左官を遣はして工事を急がせしところ、今は漸くそれも成就して、御弟子檀越方には頻りに御歸倉をお俟ち申して居られるとのこと、丁度今朝鎌倉よりその通知が御座りました。五郎とて何時までも上人をお止め申したきは山々なれど、それでは却つて上人を私するといふもの、何卒大法弘通のため、一時も早う御歸倉の程願はしう存じまする」

と云へば上人、今更ならぬ五郎の厚い志を感謝して

「大法の爲め我身の爲め、百日の間採薪及果の勞さへあるその上に、遙々人夫を遣はしてまで、再び庵室を御建立遊ばし賜ること、日蓮何とも御禮の申しやうも御座りませぬ」

と慇懃に禮を述べ、その日早速旅裝を整へて、上人には無事鎌倉へ錫を還されたのである。

茲に五郎香花の地に眞間山弘法寺といふ天台宗談林の所在寺があつた。その寺の化主權大僧都法印了性は、自分の大檀那富木五郎が此頃頻りに天下の憎まれもの日蓮に左袒して、之を恭敬尊重すると聞き甚だ悅ばず。或日五郎を寺に呼び寄せ、諷刺を交へた四方八方の話の序で、終にはなしに花が咲いて化主は忽ち眞赤になり、膝を進めてとう〳〵五郎に法論を仕向けた。けれども五郎は此時既に上人より種々法義を聽聞して、陰に本地の奧藏に達し居ることゝて少しも騷がず、彼一語此一語、問難數次の後、荆溪大師の「禀權出界名爲虛出」の文を擧げて之を詰つたところ、化主は忽ち措を失して啞の如くその口を「つぐみ、遂に一語をすら發することが出來なかつた。五郎乃ち辭し歸つて筆を呵し、早速このことを房州に歸省中の上人に云ひ送つたところ、上人より

「法印仁を破らんと欲して却つて仁に破られたること、眞とに不審と云ふ可

きである。かく一代の碩學にてありながら、如斯明文を忘却せるも、併しながら是れ謗法罪の餘殃か、亦は兎もあれ仁が日頃の御信心の深きによつて此勝を得たのであらう」

との篤いお言葉を頂戴して、大にその面目を施した事がある。

文永四年も半を過ぎて秋雨のふる八月の十五日に、上人はその弟子日朗日興等と心を單めて御介抱申上げた甲斐もなく、遂に悲母妙蓮尼を亡ひ給ふて、孝養深き身の悲しさ一入やるかたなく、泣く〳〵野邊の葬送を濟まし、茲に中陰の喪を修めて、再び鎌倉へ歸る途中、路に中山を過ぎて態々五郎の宅を見舞はれた。十二月の寒空に鉛の如うな雲が低く垂れ込めて、雪さへチラ〳〵と降つてきた。五郎は強ひて上人を止めて、茲に本地に還る新玉の年を迎え、一子日頂を上人に投じて、更にその法契を濃かにしたのである。

上人龍口の阨には官仕の身の悲しさ、五郎は獨り官房に在つて靈山に旅立つお伴の出來なかつたのを、心から悲しいものに思つた。次で上人佐渡配流の時も、又公事に妨げられて親しくお伴すること能はず、僅かに一奴を遣はして長途の旅をお慰め申したのである。

文永十年癸酉の卯月、上人は佐渡に在つて雪を嚙みながら、久遠本地の奥藏を傾け盡して、末代未有の一大法門を草し、稿成るや之を「如來滅後々五百歳始觀心本尊鈔」と名け、更に之に副狀をして、

「帷一つ墨三長筆五官給び候ひ了んぬ。觀心の法門少々之を注し、太田殿敎信御房に奉る。此事日蓮當身の大事なり。之を祕して無二の志を見ば、之を開拓せらるべきか。此書は難多くして答少し。未聞の事なれば人の耳目之を驚動すべき歟。設ひ他見に及ぶとも三人四人座を並べて之を讀むこと勿れ、佛滅後二千二百二十餘年未だ此書の心あらず。國難を顧ず、五百歳を期して之を演說す。乞ひ願くば一見を歷るの末輩師弟、共に靈山淨土に

詣でて、三佛の顏貌を拜し奉らん。恐々謹言」

と記し、以て遠く之を五郎に送り、尙太田殿曾谷敎信御房等を始め、一般同門の諸檀那に之を告げ知らしめた。

然るに諸檀那中、曾谷敎信一人この本尊鈔の文を見誤つて、文中迹門無得道の句に執じ、朝夕の看經にさへ前迹門を廢して專ら本門のみを讀誦し、頻りに一經の中本迹勝劣の異流を立てゝ、終に上人の意を曲解するに至つたことがある。此時五郎は、上人の在世既にこの異流者を生じたることを大に憂へ、一は敎信自身のため、二には滅後の諸弟子諸檀那のため、遠く一書を身延に寄せて、親しく上人の審判を仰ぎ、以つて恐るべき此等異流者の誤りを訂された。上人の書に云く

「……抑々今の御狀に云く、敎信の御房觀心本尊鈔の未得等の文字に付て迹門を讀まじと疑心の候なる事、不相傳の僻見にて候歟。去ぬる文永中に此書の相傳は整足して貴邊に奉りしが、其通りを以て御敎訓あるべく候。所詮在々處々に迹門を捨てよと書きて候事は、今我等が讀む處の迹門にて候はず、叡山天台宗の過時の迹を破し候なり。設ひ天台傳敎の如く法のまゝなりとも、今末法に至つては去年の曆の如し。如何に況んや慈覺より已來大小權實に迷ふて大謗法に同じきをや。然る間像法の利益も之れ無し、增て末法に於けるをや」

と、後復た更に五郎の書に答へて

「一、御狀に云く、太田方の人々一向に迹門に得道あるべからずと申され候。由其聞え候と是は以ての外の誤りなり。御心得へ候へ。本迹二門の淺深勝劣與奪傍正は時と機とに依るべし。一代聖敎を弘むべき時に三あり、機もて爾なり。佛滅後正法の始めの五百年は一向小乘、後の五百年は權大乘、像法一千年は法華經の迹門等なり。末法の始めには一向に本門也。一向に

外護扶宗の大檀那

本門の時なればとて迹門を捨つべきに非ず。法華經一部に於ても前の十四品を捨つべき經文之れ無し。本迹の所判は一代聖教を三重に配當する時、爾前迹門は正法像法、或は末法は本門の弘らせ給ふべき時也。今の時は正には本門、傍には迹門なり。迹門無得道と云つて迹門を捨てゝ一向本門に心を入れさせ給ふ人々は、いまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざるにこそ、以ての外の僻見なり。私ならざる法門を僻案せん人は、偏へに天魔破旬の其身に入り替りて、人をして自身共に無間大城に墮つべきにて候。つたなしつたなし。此法門は年來貴邊に申し含めたる樣に人々にも披露あるべきものなり。總じて日蓮が弟子と云つて法華經を修行せん人々は、日蓮が如くにし候へ。さだにも候はゞ釋迦多寶十方の分身十羅刹も御守り候べし云云」

と、秋霜の如く烈日の如き御嚴誡、五郎は再び又面目を施して、末法萬年の大指針となつたのである。

建治二年四月の八日、五郎の母はフトした病の起りより、五郎夫妻の心盡しもその效なく、遂に九十餘歳を一期として、靈山の旅に赴ひてしまつた。五郎は悲哀に堪えず、泣く〳〵火葬の後、骨を拾ふて頸に懸け、遙々身延の洞窟を訪ふて之を上人の祠檀の中へ加へてもらつた。五郎は母の冥福を祈りつゝ、山に留ること數日、この間終に上人の御手を勞して髮を薙し、名を更めて常忍日常と賜つた。この時上人は莞爾として常忍の雉髮を祝し、更に言葉を改めて

「貴下の高德は同門緇素の等しく仰ぐところ、以後宜しく沙門となつて吾家の上首に列り、愈々法華經のため一入御配慮の儀願はしう思ひまする」

と云へば常忍、身に餘る光榮に目を濕ませながらも、襟を正して

「不肖なる常忍、それ程まで御賢慮に相叶ひましたること、何とも冥加恐

しう覺えまする。したが常忍は元元幼少よりの出家に非ず、加ふるに德微にして行薄く、到底列祖の法器には御座りませぬ。唯だ外護の優婆塞として御許しを賜はらば、常忍の本懷に御座りまする」

と、涙を流して厚意を拜辭した。上人も常忍の意を諒としてこれを許し、以後常忍を呼ぶに「入道」と云ひ「富木足下」と呼んで、常に尊敬の意を表はされた。蓋し盛德の士は父得て子とせざるの禮であらう。

常忍供養數日の後、愈々山を去るに臨んで大事の持經を忘れ、後上人より修行者に持たせて送り遣はされたが、その時上人の御手紙に云く

「忘れ給ふところの御持經、追て修行者に持たせ之を遣はす。魯の哀公云く人能く忘るゝものあり、移宅に乃ち其妻を忘れたり云云。孔子云く又能く忘るゝこと此より甚しきものあり、桀紂の君は乃ちその身を忘れたり等云云。夫れ槃特尊者は名を忘る、此れ閻浮第一の能く忘るゝものなり。今常

忍上人は持經を忘る。日本第一の能く忘るゝもの歟。大通結緣の輩は衣珠を忘れ、三千塵劫を經て貧路に踟躕し、久遠下種の人は良藥を忘れ、五百塵點を送りて三途の嶮地に顚倒せり。今眞言宗念佛宗禪宗律宗等の學者は佛陀の本意を忘失し、未來無數劫を經歷して阿鼻の火坑に沈淪せん。これより第一の能く忘るゝものあり。所謂今の世の天台宗の學者等と持經者等との日蓮を誹謗し、念佛等を扶助する是なり。……今常忍貴邊は末代の愚者にして見思未斷の凡夫なり。身は俗に非ず禿居士、心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ。然りと雖も一人の悲母堂に有り、朝に出でゝ主君に詣で、夕に入りて私宅に歸り、營む處は悲母の爲め存する處は孝心のみ。而るに去月下旬の頃生死の理を示さんが爲めに黃泉の道に赴く。こゝに貴邊と歎て云く、齡ひ九旬に及び子を留めて親の去ること次第たりと雖も、倩々事の心を案するに去て後來るべからず、何れの月日をか期せん。二母國に

なし今より後誰をか拜すべき。離別忍び難きの間、舍利を頸にかけ足に任せて大道に出で、下州より甲州に至る。其の中間往復千里に及ぶ。國々皆飢僅して山野に盜賊充滿し、宿々糧米乏少なり。我身羸弱、所從無きが如く、牛馬合期せず。峨々たる大山重々として漫々たる大河多々なり。高山に登れば頭を天に打ち幽谷に下れば足雲を踏む。鳥に非れば渡り難く鹿に非れば越え難し。眼眩き足冷ゆ。羅什三藏の葱嶺、役の優婆塞の大峯も只今なりと云云。然る後深洞に尋ね入りて一庵室を見る。法華讀誦の音青天に響き、一乘談義の言山中に聞ゆ。案内に觸れて室に入り、敎主釋尊の御寶前に母の骨を安置し、五體を地に投げ合掌して兩眼を開き尊容を拜し、歡喜身に餘り心の苦しみ忽ち息む。我頭は父母の頭、我足は父母の足、我十指は父母の十指、我口は父母の口なり。譬へば種子と菓子と身と影との如し。敎主釋尊の成道は淨飯摩耶の得道、吉占師子靑提女目犍尊者は同

時の成佛なり。如是觀ずる時無始の業障忽ちに消え、心性の妙蓮忽ちに開き給ふ歟。然して後に隨分佛事をなし、事故なく歸り給ふ云云。恐々謹言。」

と、持經を忘れたるに對して淳々の御訓誡、而して後常忍が孝養の厚きを賞讃して委曲を盡したる、前半は以つて吾人の戒めとなすべく、後半は又以て吾人の範とすべきであらう。大權の兩聖、特にこの嚴訓を吾人に殘して後車の覆徹を戒められたる深謀遠慮、唯だ〳〵感泣の外はないのである。

この深謀遠慮の發するところ、常忍は翌三年更に末法に於ける法華經行者の位階を確然たらしむるため、態々書を身延に送つて上人自らの判位を願つた。四信五品書は卽ち之に對する上人の答書であつて、上人はこの中「壇戒等の五度を制止して、一向に南無妙法蓮華經と稱へしむるを、一念信解初隨喜の氣分となす、是れ則ち此經の本意なり……」と釋し、以て一念信解初隨喜の分齊にある吾等は名字卽の初位にあること

外護扶宗の大檀那

を尅定されたのである。

常忍は平生餘り富者の方ではなかつた。それ故上人も常に之を氣の毒に思つて、弘安二年己卯の歳、自ら大黒天の像一體を彫刻して之を送り、その送狀に

「……爰に貴邊法華經の題目の行者と申せども貧窮無極なり。又過去の謗法罪歟。而る間日蓮一作を典りて大黒天童を造立し奉り付屬せしめ畢んぬ。法華經に云く、如貧得寶。第二に無上寶聚不求自得と。……但し日蓮自作の大黒にして福分を與へんと思へども、法華經の信心名聞利養にあり、或は世間の財寶を面として廣宣流布の志無んば利生之れ有るべからず。此事能々案じ給へ。法華經の外に大黒無し、題目の行者は大黒たるべきなり。貴邊豈に大黒に非ずや。幸甚〳〵。……經に云く、於恐畏世、能須叉說、一切天人、皆應供養云云、委くは彼の大黒觀請の如し。他見に及ぶべからず。秘すべし〳〵」

と記して、陰ながらその多幸を祈られた。古諺に古より賢にして富める者は鮮しとあるが、これらは常忍の如きを云ふのであらうか。

上人恒の言葉に云く

「吾若し上行の化身ならば、常忍は定めて無邊行の再誕であらう」

と、乃ち四年更に手づから常忍の像を刻して之を座右に置き、常忍亦常に省覲せざるを憾みとし、躬ら上人の像を刻して生涯欽奉したいとふ。二像交互に點眼せるを以て、世に之を交互の影像と傳へてゐる。

五年秋八月、上人微恙を身延に示すや、常忍は直に馳せ參じて看護に力め、後復た池上に侍しては特に誠衷を竭して、少しも老の身の勞を厭はなかつた。上人示寂の御葬斂の時には香爐の役を執つて、涙ながらに暫くの間その塚側に喪を修め、軈て復た中山に還つて獨り心喪を盡してゐた。於是常忍は始

外護扶宗の大檀那

めて袈裟を着し、自ら沙門となつて法華經寺第二代の法燈を繼いだのである。

これより常忍は只管淸淨專念に唱題を續けて又他事なく、八十四歳、日頂子の勘氣を最後名殘りの遺誡として、正安元年己亥の歳終に靈山の客となつた。

嗚呼、思へば常忍日常、その初め居士の位に處して內自ら劒を帶び矛を横へて上人を護り、外本化の弘敎を扶けて當機結緣の諸檀那を導き、後上人の滅後袈裟を着し貌牀に倚るに及んでは昭朗等の六尊十八祖之を仰ぐこと恰も上人を見るが如く、同門の四衆その語を聞くこと眞に綸言を聞くが如くであつたといふ。實に常忍日常は不測の人であつた。大上人が無邊行菩薩の應世といはれたのも、決して溢美ではないのである。

五　四條金吾賴基

▲鎌倉武士の精華、俗日蓮

或日のこと、突然松葉ヶ谷の御庵室を訪れた一人の立派な武士があつた。

「御免下さりませう」

「ハア」

出て來たのは三位房日進、障子の際に手を支へて

「何御用にござりまする」

「某ことは、江馬遠江守の臣、四條金吾賴基と申するもの、御師上人に所用の儀あつて對面な仕り度く、推參なしたる者に御座りまする。」

「それは又ようこそお訪ね、暫くお待ちを願ひまする」

鎌倉武士の精華、俗日蓮

そのまゝ座敷の中へ姿を隠した三位房、軈て再びそれへ現はれて

「どうぞお上がり下されまし」

「おゝ、お逢ひ下さるとな、然らば御免下されよ」

法門の研究に餘念のない他の御弟子方に輕く會釋して、恐る〳〵上人の御居間に通つた頼基、先づ四圍の粗末な光景に似ぬ凛乎たる上人の風格に接するや、言葉もなく恭しく一禮し、偖、大小を傍側に除り揃へながら

「唯今聞え上げまいたる、江馬遠江守の臣四條金吾頼基と申す禪家のもの、實は琵琶の小路に、度々上人の御説教を聞きまゐらせたるも、力なき身には、甲乙何れともその是非を別ち難く、心中惑を重ねて愈その去就に迷ふの有さま、それ故それ等不審の條々篤と承りたく、突然ながら推參いたしまいた。以卒頼基が苦衷を御賢察あつて、然るべう御教示のほど願はしう存じまする」

慇懃に兩手を衝いて、靜かに上人のお顔を打ち見戍れば、これは又琵琶の小路に立つて大聲叱呼する激しい上人とは打つて代つて、氣宇高邁神氣颯爽、威あつて猛からぬ玉の如き溫容！　上人は慈顔に笑を浮ながら

「法門のため態々の御尊來、日蓮嬉ばしう存じまする」

と、丁寧に會釋あそばされて、それより頼基が問に應じて淳々説き出す本化の法門、初め五時起教の淺きより、禪天魔の法義は勿論のこと、終り本地難思の妙法、獨り末法應時の良藥なることの深義にいたるまで悉くこれを説き示して、偖、ヂッと聽き入る頼基の顔を差し覗きながら

「如何に四條氏、概略の法門なれど少しは御會得遊ばされしか！」

と、云へは頼基、如何にも感に堪えぬもの、如く

「先程より淳々の御法談、頼基如何にも心根に徹して、恰も無明の夢より覺めたる心地がいたしまする」

と、隨喜の涙を流しながら、その懇切なる法恩を感謝した。

火灯し頃、上人の下を辭し去つた頼基は、心の中に今日の法義を繰り返しつゝ、如何にも晴やかなる心地に左右の喧騒なる町々には目も呉ず御靈の祠の北なる我家へと歸て來た。

頼基は亡父以來、半ば醫を以つて主君江馬入道に仕へてゐた。けれどもその性質は頗る豪氣に富んで、誠忠義烈、眞に鎌倉武士の好摸範たるに耻ぢぬ風格を備へてゐた。

「圓教房の來りて候しが申　候は、江馬の四郎殿の御出仕に御とものさふらひ廿四五、其中に主はさておき奉りぬ。ぬしのせいといひ、かほたましひ馬下人までも、中務の佐衞門尉第一なり。あはれ男や男やと、鎌倉わらはべは辻にて申し合ひて候しとかたり候云云」

と、祖文によつて見るも、如何に彼の風姿の雄々しかつたかゞ、推量されるのである。

彼は其後も屢々松葉ヶ谷の草庵を訪ねて、いつも日の暮るを知らず、歸れば、これを妻に語り弟等に語つてその法益を頒ち、時には又荏原、池上等の同志に傳へてその喜びを與にしてゐた。宿緣の薫發する處、それが爲め今迄の疑氷は漸く解けて圓信益確く、遂に上人の諸檀那中、出色の信者となることが出來たのである。

彼の家庭は、妻及舍弟三人の都合五人暮しであつた。舍弟三人は同じく江馬氏に仕へて至誠至忠、妻はその容貌端麗なるが如く心も亦優雅に後年夫の不遇に逢ふも、一意その慰籍に力めて嘗て怨恨の嘆を漏さず、加ふるに夫の漸く上人の德に感じて法華經の信者となるや、亦自らも眞言の出なるにも拘らず、其の球數を斷ち切つて上人に信從し、常に異體同心の嚴訓を守つて、家庭團欒の中心をなしてゐた。上人も他の諸檀那とは違つて、問はるゝまゝ

鎌倉武士の精華、俗日蓮

によく家庭の些事に至るまで懇切なる注意を賜ひ、その妻懐胎と聞ひては符を送られ、又無事出生と聞ひては月満御前の名を賜ひて

「……定めて十羅刹女は寄合てうぶ水をなで養ひ給らん。あらめでたやあらめでたや、御悦び推量申候。念頃に十羅刹女天照太神等にも申して候……」

と、御悦びの言葉を送られ給ふが如き、恰も父の子に臨むが如き情を以つて對せられたのである。されば常々も賴基に對しては

「法華經の信心を通し給へ、火をきるに休みぬれば火をえず、強盛の大信力を起して法華宗の四條金吾、四條金吾と鎌倉中の上下萬人乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ。あしき名さへ流す、況やよき名をや、何に況んや法華經ゆへの名をや。女房にも此由を云ひふくめて、日月兩眼雙のつばさと調ひ給へ。日月あらば冥途あるべきや。兩眼あらば三佛の顔貌拜見

疑なし。雙のつばさあらば寂光の寶刹へ飛ん事須臾刹那なるべし」

と、宣ひ、又女房に對しても

「大闇をば日輪やぶる。女人の心は大闇の如し。法華經は日輪の如し。幼き子は母を知らず、母は幼子をわすれず。釋迦佛は母の如し。女人は幼子の如し。二人互に思へばすべてはなれず。一人は思へども一人思はざれば、或時は合ひ或時は合す。佛は思ふ人の如し。女人は思はざるものゝ如し、我等佛を思はゞ爭か釋迦佛見え給ざるべき……」

と、只管その信仰の激勵に努められたのである。斯して彼等の信仰は益金剛の堅きを加えて、終には上人より、彼自身は勿論のこと、女房までも

「……前後を辨へざる女人なんどの各佛法を見ほどかせ給はぬが、何程か日蓮について悔しとをぼすらんと心苦しかりしに、案に相違して日蓮よりも強盛の御志どもありと聞え候は、偏へに只事にあらず教主釋尊の各の

鎌倉武士の精華、俗日蓮

御心に入り替らせ給かと思へば感涙押へ難し……」

と、御賞めの言葉を頂戴するまでになつたのである。

文永八年九月十二日、頼基が上人龍の口に於て今や御最後といふ時

「唯今なり！」

と泣いて、自分も亦腹かき切らんと双肌脱いだことは、啼く上人の心を動かしたと見え

「さても〳〵去る十二日の難のとき、貴邊たつのくちまでつれさせ給ひ、しかのみならず腹を切らんと仰られし事こそ、不思議とも申すばかりなけれ……かゝる日蓮にともなひて法華經の行者として腹を切らんとの給ふ事、かの弘演が腹をさいて主の懿公が肝を入れたるよりも百千萬倍すぐれたる事也。日蓮靈山にまいりてまづ四條金吾こそ法華經の御故に日蓮とをなじく腹切らんと申し候なりと申上候べきぞ……」

と感謝され、又

「返す〳〵も今に忘れぬ事は、頸切られんとせしとき、殿は供して馬の口に付て泣き悲み給ひしは、如何なる世にも忘れ難く、假ひ殿の罪深くして地獄に入り給はゞ、日蓮を如何に佛に成さんと釋迦佛誘へさせ給ふとも用ひ進らせ候べからず、同じく地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入らば、釋迦佛法華經も地獄にこそ御座すらん……」

と、未來までをも共にすべく契られたのであつた。次で頼基は上人の佐渡へ謫せらるゝや、追慕の情禁ずる能はず、種々の品を調へて遙々北海の荒波を越へ、雪の塚原に親しく上人を訪ひ奉つて、遂に上人をして、

「……佐渡の島に放たれ、北海の雪の下に埋れ、北山の嶺の山嵐に命助かるべしともおぼへず。年來の同朋にも捨てられ、故郷へ歸らん事は大海の底のちびきの石の思ひして、さすがに凡夫なれば古郷の人々も戀ひしきに、

鎌倉武士の精華、俗日蓮

在俗の宮仕隙なき身に此經を信ずること希有なるに、山河を凌ぎ蒼海を經て遙かに尋ね來り給ひし志、香城に骨を碎き雪嶺に身を投げし人々にも爭か劣り給ふべき……」

と、心からなる感謝の辭を送らしめ、その熱誠恰も俗日蓮の感を與ふるものがあつた。上人が

「只事の心を案ずるに、日蓮が道をたすけんと、上行菩薩貴邊の御身に入りかはらせ給へるか、又教主釋尊の御計ひか……」

と、感激されたのも、決して唯事ではないのである。

然るに賴基に取つては、玆に一つの大事件が到來した。それは寧ろ何時かは起るべき自然の問題であつて、則ち自分の信仰と、主君江馬入道の信仰との相違より起る悲劇であつた。一方上人よりは

「心は日蓮に同意なれども身は別なれば、與同罪のがれがたきの御事に候……」

と悲まれ、他方主君よりは、鎌倉殿の持て餘しもの剛慢不遜の日蓮が與黨として取り扱はれ、殆んどその進退に窮したのである。けれども彼は恩義ある主君の、徒らに邪師邪法を信受して、尊き慧命を失はんことを悲み、斷然意を決して遂に法華經の法義をその耳に聞え上げたのであつた。六難九易の識文空しからず迫害は直ちに彼が身邊を襲ふて、主君よりの御勘氣は勿論、所領は沒收され、兄弟朋友にも見棄てられて、猶その上惡朋輩共の常に付け狙ふ處となつた。それ故上人も痛くこのことを心にかけられて、

「……主君の此法門耳にふれさせ進らせけるこそありがたく候へ。今は御用ひなくもあれ、殿の御失は脫れ給ひぬ。此より後には口をつゝしみておはすべし。又天も一定殿を守らせ給ふらん。此よりも申す也。かまへてかまへて御用心候べし。いよ〳〵にくむ人々狙ひ候らん。御さかもり夜は一

向に止め給へ。只女房と酒うち飲んでなで御不足あるべき。他人の畫の御さかもり油斷るべからず。酒を離れて狙うひま有るべからず」

と警告し、又

「……此文御覽ありて後は決して百日が間をぼろげならでは、どうれい竝に他人と我宅ならで夜中の御さかもりあるべからず。主の召さん時は、畫ならば急ぎ參らせ給ふべし。夜ならば三度までは頓病の由を申させ給ひて、三度にすぎば下人又他人をかたらひて辻を見せなんどして御出仕あるべし。かうつゝしませ給はんほどに、豪古の人も寄せなんどし候はゞ、人の心又さきにひきかへ候べし……」

と、氣煩はれたのである。そして猶不遇のため世を悲觀することもやあらばと懸念遊ばされて、

「一切衆生、南無妙法蓮華經と唱ふるより外の遊樂なきなり。經に云く衆生所遊樂云云、此文あに自受法樂にあらずや。衆生のうちに貴殿もれ給ふべきや。所とは一閻浮提なり。日本國は閻浮提の中なり。遊樂とは我等が色心依正ともに一念三千自受用身の佛にあらずや。法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし。現世安穩後生善處とは是なり。たゞ世間の留難來るともとりあへ給ふべからず。賢人聖人も此事はのがれず。たゞ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經と唱へ給へ。苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經と唱へ居させ給へ。これあに自受法樂にあらずや。いよ〳〵強盛の信力を致し給へ。恐々謹言」

と、自受法樂の慰安を與へられた。けれども賴基は、かゝる窮地に陷つても、猶且つ主君の迷蒙を憐んで、露怨恨の情を發さず、度々上人よりも、

「……若やの事候ならば、越後よりはせ上らんは遙かなる上不定なるべし。たとひ所領を召さるゝなりとも、今年は君を離れ候べからず……すてら

れまゐらせ候とも命はまいらせ候べし……」

と注意されし如く、蔭ながらも却つて誠忠の志を勵んでゐたのである。

然るに傍人の讒言を深く信じてゐた主君の命は、益峻酷を極むるものがあつた。江馬氏は遂に傍人輩の讒言より構草せられたる一文を綴つて最後の通牒を賴基の下に送り、以て斷然法華經を棄つべきの起請文を奉るべしと嚴命した。賴基に取つてこれ程の苦痛が又とあらうか。彼は身を切らるゝよりも堪え難いことに思つたのである。乃ち彼は決然として筆を呵し、血涙を絞つて硯の水となし、縷々數萬言を綴つて是に對する讒誣を解き、更に自分の法華經に對する所信を披瀝して、

「……日蓮上人の御房は、三界の主一切衆生の父母釋迦如來の御使上行菩薩にて御座し候けることの、法華經に說かれてましましけるを信じまゐらせたるに候」

と云ひ、尙主君に對する誠を表白しては、

「……下狀に云く、是非につけて主親の所存には相隨はんこそ佛信の冥にも世間の禮にも手本と云云。此事最第一の大事にて候へば私の申狀恐れ入り候間本文を引くべく候。孝經に云く、子以て父に爭はずんばあるべからず。臣以て君に爭はずんばあるべからず、鄭玄云く、君父不義あらんに臣子諫めざるは則ち亡國破家の道也。新序に云く、主の暴を諫めざれば忠臣に非る也。死を畏れて言はざるは勇士に非る也。傳敎大師云く、凡そ不誼に當つては則ち子以て父に爭はずんばあるべからず、臣以て君に爭はずんばあるべからず。當に知るべし君臣父子師弟以て師に爭はずんばあるべからず。注華經に云く、我れ身命を惜まず但だ無上道を惜む。涅槃經に云く、譬へば王の使能く談論し方便に巧みにして命を他國に奉ずるに、寧ろ身命を失ふとも終に王の所說の言敎を匿さざるが如し。章安大師云く、寧ろ身

命を喪ふとも教を匿さずとは、身は輕く法は重し身を死して法を弘む云云。乃至、賴基をば傍輩こそ無禮なりと思はれ候らめども、世の事にをき候ては是非父母主君の仰せに隨ひまゐらせ候べし。それに取つて重恩の主の惡法の者にたぼらかされましまして、惡道に墮ち給むをなげくばかり也……」

と述べ、又、

「……かくの如き僻事をなまじゐに承りて候間次を以て申さしめ候。官仕をつかまつる者上下ありと申せども、分々に隨つて主君を重んぜざるは候はず。上の御ため現世後生あしくわたらせ給ふべき事を祕かにも承りて候はむに、傍輩世に憚りて申上ざらむは與同罪にこそ候まじきか。隨つて賴基は父子二代命を君にまゐらせたる事顯然也。故親父、故君の御勘氣かうぶらせ給ひける時、數百人の御内の臣等心がはりし候けるに、中務（親父）一人最後の御供奉して伊豆の國まで參りて候ひき。賴基は去文永十一

年二月十二日の鎌倉の合戰の時、折節伊豆の國に候しかば、十日の申の時に承りて唯一人箕根山を一時に馳せ越えて、御前に自害すべき七人の内に候き、自然に世しづまり候しかば、今に君も安穩にこそわたらせ給ひ候へ。爾來大事小事に付けて御心やすき者にこそ思ひ含まれて候。賴基が今更何につけて疎緣に思ひまゐらせ候べき。後生までも隨從しまゐらせて、賴基成佛し候はゞ君をもすくひまゐらせ、君成佛しましまさば賴基もたすけられまゐらせんとこそ存じ候へ……」

と綴り、最後に至誠君に法華經の信仰を勸めて後、

「……剩へ起請に及ぶべき由仰せを蒙るの條、存外に歎き入つて候。賴基不法持病にて起請を書き候ぼどならば、君忽ちに法華經の御罰を蒙らせ給ふべし……」

と、一語截然、君を思ふの至情より、遂に起請文の呈出を拒むべく筆を結

んだのであつた。彼はかく草し終るや、直にこれを上人に諮り、以つてその斧正を乞ふたのである。あゝ、侃々の言、諤々の議、而もその間一縷法華經を信じ君を思ふの熱情涌然として字句の間に動くを見ることが出來るのである。これを手にせられた上人の感慨果して如何

「去月廿五日の御文、同月の廿七日の西の時に來りて候。仰せ下さるゝ狀と、又起請書まじき由の誓狀とを見候へば、優曇華のさきたるをみるか、赤栴檀のふたばになるを得たるか、めづらし、かうばし」

と、上人は直に墨すり流して其志を激賞され、陳狀には懇ろに筆を加へて、再びこれを彼が下に送り返した。そして尙よく機を見て呈出すべき由をも云ひ送つたのである。

その後上人は、更に筆を改めて、

「……いかにいとをし、はなれじと思ふ妻なれども死ぬれば甲斐なし。い

かに所領を惜しとをぼすとも死しては他人の物、すでに榮へて年久し、少しも惜しことなかれ。又さま〴〵申すが如く、さき〴〵よりも百千萬億倍御用心あるべし。日蓮は少より今生の祈りなし、只佛にならんと思ふ許り也。されども殿の御事をば、ひまなく法華經釋迦佛日天に申す也。其故は法華經の命を繼ぐ人なればと思ふ也。穴賢穴賢。あらかるべからず。吾家にあらずんば人に寄合ふ事なかれ又夜廻りの殿原は一人も賴もしき事はなけれども、法華經の故に屋敷を取られたる人々なり。常に睦ばせ給ふべし。又夜の用心の爲めと申し、かた〴〵殿の守りとなるべし。吾方の人々をば少々のことをば見ず聞かずあるべし。さて又法門なんどを聞ばやと仰せ候はんに、悅んで見え給ふべからず。いかんか候はんずらん。御弟子共に申してこそ見候はめと、やは〳〵とあるべし。いかにもうれしさに色に顯はれなんと覺え聞んと思ふ心だにも付かせ給ふならば、火をつけてもすがご

鎌倉武士の精華、俗日蓮

く、天より雨の下がごとく、萬事をすてられんずるなり。又今度いかなる便も出來せば、したゝめ候ひし陳狀を上げらるべし。大事の文なれば、ひとさわぎは必ずあるべし。穴賢穴賢」

と、毎々彼が身邊を注意遊ばされた。

けれども忠言は耳に逆い、良藥は口に苦きの道理、この陳狀一度主君の膝下に奏聞せらるゝや、彼が至情は却つてその憎惡を高調せしめて、惡朋輩共の構へなす迫害は、益彼が身邊に蝟集し來るのであつた。されど又翻つて考ふれば、至誠は金石をも爍かし鬼神をも泣かすの道理、彼が至情は日を經るまゝに漸く主君の覺るところとなつて、遂には主君を邪師邪法の迷蒙より救ひ出し、以て法華經の信仰に誘ひ入れ、剩へ自分には先きの所領に增したる領を賜つて、益倍舊の寵を得ることゝなつたのである。上人は此事を遙かに聞ひて夢かと計り打ち喜び、早速

「惣目一貫文給ひ候ひ畢んぬ。御所領上より給はらせ給ひて候なる事まことゝも覺へず候。夢かとあまりに不思議に覺へ候。……されば此度は、いかんが有るべかるらんと疑ひ思ひ候つる上、御内の數十人の人々訴へて候へば、さればこそいかにもかなひがたかるべし。あまりなることなりと疑ひ候つる上、兄弟にもすてられておはするに、かゝる御恩面目申すばかりなし。かの處は殿岡の三倍とあそばして候上、佐渡の國の者のこれに候がよく〳〵其處を知て候が申し候ば、三箇郷の内にいかだと申すは第一の處也、田畠はすくなく候へども、德は量なしと申し候ぞ。二所は御年貢千貫一所は三百貫と云云。かゝる處なりと承る。なにとなくとも同隷といひ親しき人々と申し、捨はてられて笑ひ喜びつるに、殿岡に劣りて候處なりと候。いかにも御下し文は給びたく候ひつるぞかし。まして三倍の處なりと候。いかにわろくとも、わろきよし人にも又上へも申させ給ふべからず候。よき處よ

き處と申し給はゞ、又かさねて給はらせ給ふべし。わろき處德分なしなんど候はゞ、天にも人にも捨てられ給ひ候はんずるに候ぞ……いよ〳〵道心堅固にして今度佛になり給へ。御一門の御房だち又俗人等にもかゝるうれしき事候はず。かう申せば今生の欲とおぼすか。其も凡夫にて候へばさも候べき上、欲をも離れずして佛になり候ける道の候けるぞ。普賢經に法華經の肝心を說きて候。不斷煩惱不離五欲等云云。天台大師の摩訶止觀に云く、煩惱卽菩提生死卽涅槃等云云。龍樹菩薩の大論に法華經の一代にすぐれていみじきやうを釋して云く、譬へば大藥師の能く毒を變じて藥と爲すが如し等云云。小藥師は藥を以て病を治す、大醫は大毒を以て大重病を治す等云云」

と認めて、その法華を祝福されたのであつた。

然し假令主君の寵は返る共、尙心すべきは彼が身邊の惡朋輩共であつた。

小人の常として惡は惡として之を憎み、善は善として又之を嫉むの理り、それ故上人は更に書を寄せて、

「……敵と申す者は忘れさせて狙ふものなり。是より後に若やの御旅には御馬を惜ませ給ふべからず。よき馬に乘らせ給へ。……」

と、一層彼が身邊の注意を怠るべからざる事を喩されたのである。然るに果然、敵は彼の虛に乘じてその眼前に現はれた。けれども幸ひに彼の優秀なる武術は、難なくこれを取りひしぐ事が出來て、上人よりも

「先度强敵ととりあひについて御文給ひき、委く見まいらせ候。さても〳〵敵人に狙はれさせ給ひしか、前々の用心といひ、又けなげといひ、又法華經の信心つよき故に難なく存命せさせ給ひ、目出たし目出たし……諸餘怨敵皆悉摧滅の金言むなしかるべからず……」

と、痛く之を喜ばれたのである。

以上、かくして彼が法華經の信仰より起る況滅度後の悲劇は、漸く茲に大團圓を告げて、我此土安穩、天人常充滿の佛境界は生きながらその眼前に展開するに至つたのである。現世安穩の證文、眞とに疑なきものといふべきであらう。

以後彼は時々身延を訪問しては親しく上人の安否を伺ひ、遠く不例と聞いては遙々藥を參らせてその全愈を祈り、又妻をして時々防寒の衣を送らしむる等、只管上人の老を慰むることに力めてゐた。

「白小袖一つ綿十兩慥かに給び候畢ぬ。歳もかたぶき候。又處は山の中、風烈しく庵室は籠の目の如し。打敷物は草の葉、着たる者はかみぎぬ。身の冷る事は石の如し。食物は氷の如くに候へば、此御小袖給び候てやがて身を暖まらんと思へ共、明年の一日とかゝれて候へば、迦葉尊者の雞足山にこもりて、慈尊の出世五十六億七千萬歳をまたるゝも斯や久かるらん」

一讀如何に師檀の情誼の濃かで有たかを涙察する事が出來であらう。

弘安五年冬十月、上人は一代奮闘の歴史を收めて、池上に非滅現滅の大涅槃を示され樣とした。此時彼は醫術にも長じたれば、少時もその病床を離れず、遂に看護のため態家に一族の子を迎えて月滿姫に之を妻合し、自らは主君に骸骨を乞ふて、一意專心日夜上人の看護に力たのである。それ故上人も少からずその德に感じて、病床にその身を起しながら

「今に初めぬ貴邊の志、日蓮何共お禮の申樣も御座りませぬ。既に先々にも申せし如く、日蓮鷲て靈山淨土に參りてあらん其節には、キット蓮臺の半座を分つて、必ず貴邊をお待ち申しておることで御座りませう」

と、涙を流しつ、望みに任せて彼が頭髪を剃除し、名を玄收日賴と賜つたのである。賴基も同じく嬉し涙に呉ながら「本門の三祕必ず持ち奉る……」と、難有く本門本尊の前に三禮し、妻をも勸めて共に上人の御弟子となつた

のである。上人示寂の後には、夫婦ともその塚側にさゝやかなる廬を結んで終身山を出でず、十九年の間恰も生ける上人に仕ふるが如く追慕の唱題を續けてゐた。妻日眼は夫に後るゝこと四年、溘焉として靈山に夫の後を追はれたのである。

あゝ鎌倉武士の精華、法華經の權現、俗日蓮の稱ある四條金吾賴基の一生こそ、その妻日眼の信仰と共に末代行者の好模範と云はねばならぬ。

六　工藤左近尉吉隆

▲杜鵑血に泣く最後の聲

「唯今往てまゐりまいた」

「おゝ、して上人の御首尾は如何がありしか？」

「さん候。上人には、久しく見ぬ故郷の急に懷かしく、先いつ日遙々鎌倉より下向して、この小湊に母君を訪れたまひ、歸途華房の蓮華寺に道善老師とも一夕の懇談を重ねて、日ならず復た鎌倉へお歸りなさりやうとするところ、然るに御請待の義申し入れまいたるに、快く御承諾遊ばされて、明日は間違なう午の刻頃に華房をお立ちなさるとの事で御座りまいた」

「おゝ、すりや早速の御承諾か、あゝ忝ないことである。これにて吉隆が日

頃の念願も屆いたといふもの、汝もいかひ御苦勞であつた」

「恐れ入りまする」

使者の下がつた後、吉隆は早速女房始め、家の子等總ての者にこの由云ひ含めて、明日はいよ〳〵上人を館に迎ふべく、内外の掃除は勿論、料理調度の類に至るまで、一々自ら深い注意を拂つて待つてゐた。

然るに、茲に憎むべきは、彼の法敵東條左衞門影信が卑怯未練な振舞である。彼は上人が去ぬる建長五年宗旨建立當時に於ける大獅子吼に、散々自宗を罵られたことの口惜しく、怨み心根に徹して、隙もあらばと常に上人を付け狙つてゐたところ、折りも折り、丁度上人の歸省中明日は華房より天津の館へ赴くとのこと傳へ聞いて、心中密かに打ち喜び

「おのれ憎ッくき日蓮奴！　キット目に物見せて呉れん」

と、その夜早速復心の家來一人を膝元近く呼び寄せて、斯々と一什始終の

物語りをなし

「高が一人の痩法師、そう大業なことも入るまいが、然し射逃がしては事面當ゆゑ、百人餘りも用意して、あの小松原の松蔭に忍ばせ、通りかゝるを四方より打つて出でなば、囊の中の鼠も同樣、やはか射逃すことも無いであらう」

「仰せの通り、あの小松原こそ屈强の場所、その上百人餘りの伏勢あれば、たとひ日蓮奴に、神通不思議の術あればとて、いつかな射失ふことはムりませぬ」

「然らば萬事手ぬかりこれなきやう確と用意いたし置かうぞ」

「委細かしこまつてムりまする。したがその代り、若し美事にゆきまいたならば……」

「さて、汝の疑ひ深かひ。事成就の曉には、それこそ澤山の褒美を取らせる

杜鵑血に泣く最後の聲

わ」

「それ聞いて安心いたしまいた。然らばこれにて御免蒙りまする」

行燈の火影に血に狂ふ惡鬼のやうな顏を照されながら、影信はそれからやや暫時、明日小松原に於ける地の理など、色々と思ひ煩つてゐた。

神ならぬ凡夫示現の上人には、影信にそんな惡ひ謀計のあらうとはツイ氣が付かず、その翌日の午の刻頃、供には日朗日澄鏡忍乘觀等、歸依の男女十餘人を隨へ、御聲高らかに御題目を唱へながら、折から吹き來る冬枯れの冷たい風に法衣の袖を翻へしつゝ、霜に荒れた畷徑を、程遠からぬ天津の館へと急ぎゆかれた。

軈て一行の小松原に差し蒐つて、路の兩側より生茂る小松の間を縫ひながら、今や丁度その中程とも思はれる處まで來た頃ひ、不思議や、忽ち上人の眼前を掠めて、閃光の如く過ぎ去つた一本の征矢、それが幸にも向ふの松の

根方に刺つたかと見る間もなく、續いて第二第三第四の矢は、隙もあらせず上人の身邊を掠めて左右に流れた。ところの時、横手の松蔭よりヌックと立ち現はれた東條左衞門、遙かに馬の手綱を控へながら、上人を呼ばり罵つていふやう。

「やあ／＼賣僧日蓮よツく承れ、汝僅かの才覺を鼻にかけて、徒らに諸宗を惡口し彌陀を罵ること、最も片腹痛き處なり。その上憎みても尙餘りあるは、先年清澄に於て、この影信が前をも憚らず、衆人稠座の中に念佛無間、禪天魔と吐かしおつたその舌の根、今日こそは、汝が久方振りの歸省を幸ひ、その舌の根を搔き切つて、阿彌陀佛の靈前に供へんの所存、早々先非を後悔して、神妙に覺悟せよ」

と、一刀スルリ拔き放つて、眞向上段に振り翳しながら、鐙を合はして一蹴强く馬を蹴つ、壺の如く射る矢と共に、眞一文字に上人目蒐けて切り込んだ。

この有樣を見た伏勢共は、一時に上人の前後左右より現はれて

「それ打ち捕れや」

「それ逃がすな」

と潮の如くに推し寄せて、忽ち上人等一行の周圍に及の擅を作つたのである。

一行の中に於ては、物の用に立つべき者は、僅かに鏡忍、左藤次、長英等四五人位に過ぎなかつたが、勢ひ急と見るや

「各々覺悟あれ、法華經の爲なるわッ！」

と、素早く襷を十字に引き結んで手當り次第手頃の獲物を引提げつゝ、目に餘る狼藉人に向つて二王立ち

「卑怯なるかな平の影信、道に要して人の虛に入るとは、儲も未練なる振舞なり。汝等如きものこそ武士の風上にも置けぬ無賴の奴原、いで尋常に勝負せよ」

と、聲を揃へてハッタと四邊を睨まへ、手に〳〵獲物を打ち翳して、當るを幸ひ右左、縱橫無盡に薙ぎ立て蹴立て、力を盡して荒れ廻れば、遉がの敵軍もその氣に呑れて、タヂ〳〵と二三歩後へ引き退き、圍陣漸く破れて逃げ脚ひるんで見えたる時、影信馬上に在つて聲荒らげ

「端たなき味方の振舞かな、これしきのもの何事がある。それ疾く打ち捕らぬかッ！」

と、大聲叱咤して僅かに勢を盛り返へし、自ら馬を陣頭に進めて、阿修羅の如く荒れ狂ふことやゝ暫時。如何にせん、一行の人々は多勢に無勢、遂には激しく追ひ詰められて、亂軍の中、鏡忍坊は肩先二つに打ち割られ、佐藤次も左の股に矢を射拔かれて動と座し、殘る乘觀長英も夥多手傷を負ひて、已に危く見えたる時、華房よりこの天津までは、道程もさまで遠からぬに、

何故の御遲參かと、態々北浦忠吾、忠内の兄弟を召し伴れて、途中まで上人を出迎えたる工藤吉隆、遙かにこの樣を見て、打ち驚くこと一方ならず

「すわこそ御師の一大事、各々續かれよッ！」

と、言ひも終らず、妻手刀の垂緒を取つて袖ひき絞り、袴の側立並折りつつ、眞一文字に駈せ着くれば、影信馬上にキッとこれを見て

「いらざる處へ工藤が助太刀、えい小癪なり、面當なッ！」

と、弓に矢を番げ狙ひを定め、ハッシとばかりに切て放てば、吉隆は身を沈めて其矢を避け、射損じたりと影信が、續ひて乙矢を番げて射る處を、矢よりも早く飛び來る吉隆、影信目がけて切つてかゝるを、影信早くも身を交はし、發矢と受けて丁と返へす、鏗々の響、火花の雨、互に祕術を盡して鬪り合ふ、何れ劣らぬ龍攘虎搏、やゝあつて影信の、頻りに氣を焦つて切り下る刀の隙を見澄したる吉隆、一刀高く上段に振り翳して

「汝れ法敵覺悟せよッ！」

と、切り込む途端、影信が郎黨等凡そ十人餘り、忽ち吉隆が前後左右を追取卷いて、滅多打ちに切り付くれば、元より金鐵にあらぬ身の、數個所の痛手に力漸く弱り、終に多勢に切り落されて、吉隆はそのまゝ松の根方に動と仆れ伏してしまつた。

「えい小氣味のよい無益な犬死、この影信に刄向ふとは、笑止とも慮外とも、身の程知らぬ痴漢じやわッ！」

と言ひ棄てゝ、外の者には目もくれず、一目散に上人の側へ、馬一文字に乘り迫つた東條影信、カット憤怒に燃ゆる目を見開き

「いかに日蓮、此期に及んで兎角の雜言無用なり。日頃の遺趣思ひ知れやッ！」

と、馬上二尺七寸の太刀眞向に振り上げて、この痩法師唯だ一ト打ちと切

り付けた。この時上人は、右の手に念珠を推し戴き、一心罩めて

「妙法蓮華經序品第一！」

と、九字を切り給ふに、不思議や身は眞ッ二つと思ひの外、珠數の母珠二つに割れて、身には僅かに右筋違ひ、額に三寸ばかりの疵を蒙つたのみであつた。

「えゝ、仕損じたり、殘念ッ！」

と、太刀取り直して又もや切り付けんとするその折柄、空中に鬼形の鬼子母尊神現はれて、日月の如き御眼に、ハッタと影信を睨まへ、影信の五體忽ち打ち慄んで、馬上より眞逆樣に落つるを見るや、そのまゝ搔き消す如く姿を隱してしまつた。とこの時、颯つと一陣吹き來る夕風に空は一面、見る〳〵黑墨を流したる如く搔き曇つて、天地は唯だ眞の闇と化してしまつた。上人はその暇に僅かに玆を遁れて、程遠からぬ老樹の蔭に身を寄せながら、生き

殘る弟子共の身の上を案じつゝ、暫時そこに身を休めてゐた。

不意の神變に、少からず膽を消して馬より落ちた影信は、軈てフト我に返つて四邊を見廻すに、天地はいつの間にやら眞の闇、家來らしい人影も見えぬに亦復怖氣だち、愴徨闇を衝いて何處ともなく逃げ失せてしまつた。

この時天地は再び元に復して、蒼然たる暮色の中、松が枝の靜かに空を畫つて搖ぐ景色が、如何にも荒涼たる淋しさをは思せてゐた。上人は一人こゝまで落ちのびては來たものゝ、弟子等の身の上も氣にかゝれば、先程天晴法華經の爲めに殉死した、鏡忍、左藤次、さては吉隆等を不憫に思召され、今や法敵の悉く四散したるを幸ひ、小聲におん題目を唱へつゝ、元の場所に來てみれば、無殘や鏡忍左藤次は已に息絶えて、吉隆ばかり獨り苦しい呼吸を續けてゐた。上人は兩眼よりせき來る涙をハラハラと流して、先づ紅に染む鏡忍左藤次の遺骸に厚く回向をなし、それよりこれも血潮に染む吉隆の側にす

り寄つてやをら小腰をかゞめつ

「日蓮なるぞ吉隆、氣を確かに持たれよ」

と、一聲高く呼び活けられしに、その御聲の耳に入つてか、吉隆夢の如く

に兩眼を見開き

「あゝ、御師にてお座せしか、お懐しう厶りまする」

と、言ふも僅かに蟲の息

「我に代つて法華經のため、天晴戰死を遂げたること、日蓮嬉しふ思ふぞよ」

と、輕く背に手を置けば

「あゝ、嬉しう厶りまする」

と、聲は次第に嗄れてゆく

「何か言ひ遺すことはなきか？」

と云はれて吉隆、嬉し涙に目を潤ませ

「ようこそ問ふて……下されまいた……唯だ某の氣に掛るは……妻の腹なる一子の身の上……若しその兒の男子にてあるならば……願くは御弟子の一分に……加へて賜れかし……あゝ南無妙法……」

と、そのまゝ息は絶えてしまつた。上人はこの不憫い臨終の際の切ない願事に、痛く吉隆の死を憫み、熱い涙を法衣の袖に絞りながら、やゝ暫く經を誦してその菩提を弔ひ、軈て影信が再擧を慮つて、それより武藏の往還市ケ坂の方にその跡を晦まされた。

その翌日、上人は漸く日朗日澄を始め、吉隆の父工藤行光に迎えられて、その館に赴き、涙ながらに一什始終の物語をなし、鏡忍左藤次は勿論のこと、吉隆の遺骸をも、出家の儀式を以つて厚くこれを送葬し、特に法號を授けて妙隆院日玉聖人と賜はつたのである。後年、刑部阿闍梨日隆と云つたのは、實に吉隆が遺れがたみの一子であつた。

七　波木井六郎實長

▲粉骨碎身九年の奉公

二三日以來掃除萬端の仕度も調ふて、今日は早や唯だ上人一行の御入山を俟つばかり、實長は朝から何となく心も引き立つて、言ひ知れぬ法悦の情に身を唆られながら、幾度も門の柱に倚つて下手の道を打ち眺めた

昨夜南部に一泊された上人は、この日辰の刻頃御供には日興日向日頂日持日進の上足方、及び久本坊熊王四郎の二人を隨へて南部を發足し、途に横根相股を過ぎて玆に計らずも實長の一族一條太郎光家の案内を得、それより川添ひの羊腸たる坂路を分けながら、漸くにして午の刻頃波木井の郷へ着かせられた。

遙かにこの樣を見た見張りの郎奴は、急ぎ邸内に引き返して來て

「上人の御一行には唯今村端へ御着に御座りまする」

と注進する。

「おゝ太儀であつた。然らば實長これよりお出迎ひに參るであらう」

と更めたる衣服の襟を正して、家の子等と共に途中までこれを出迎え、慇懃に旅情を勞ひながら一行を先導して邸内に請じ入れ、自ら上人の旅裝を解ひて洗足手水その外何くれとなく勞り援け、一行の上へ上がるを俟つて豫めしつらへ置きたる一室に上人始め供奉の人々を案内し、先づ茶を侑め菓子など參らせたる後、家の子郎從悉くこれを呼びよせて遙かに下座に控え、偖自らも下座に直つてその列の前に威儀を正し、恭しく兩手を着ひて懷しむが如く上人のお顔を仰ぎ見た。

「數ならぬ實長が情願ばしお聽しあつてようこそのお越し、實長は勿論のこ

と家族一同の者冥加至極に存じ奉ります」と厚く禮を述べ「して御師を始め各御上足方には長途の御旅程、嘸かしお疲勞のことに御座りませう」

と丁寧に挨拶すれば、上人には殊の外御機嫌麗はしう

「いつに變らぬ殿の御芳志、日蓮嬉しう思ひまする。お言葉に甘へ、去ぬる十二日鎌倉を發足して、本日やう〳〵御當地へ參りました。この上は何分ともに宜敷しう御配慮下されよ」

と懇ろに禮を交される。

天地を聘睨し風雲を叱咤したる一代の英傑、今や五十年奮闘の歴史を收めて遙々この邊地に唯だ一介の實長を訪ね入らせられたること、思へば冥加の身に餘る奇しき因縁と言はねばならぬ。

實長は上人の優しいお言葉に早や鼻を塞らせて

「實長元より薄德の者、到底御滿足なるお取り做しは叶はずとも、親子郎從

力を協せて、今生が程は必ずお貢ぎ申上ぐることで御座りませう。その代り實長等が後生こそ、何卒お助け下さるやう、偏へにお願ひ申上げまする」

と云へば上人も實長が僞らざる眞心に思はずホロリとして

「かゝる山間の地に、態々殿をお訪ね申せしも、これ併しながら宿世の淺からざる因縁と云ふもの、後生は必ず共に相携へて本佛の顏貌を拜見し奉ることで御座りませう」

と快く靈山の約束を逐げられたのである。實長は嬉し涙に目を霑ませ、暫くは無言のまゝ、容易に顏さへ上げ得なかつた。

やゝあつて實長は漸く涙の目を上げて、更めて家の子總てを上人及び各上足方に引き合せ

「何卒宜敷う御示敎の程をお願ひ申しまする」

と一同と共に頭を下げ、上人よりも色々と難有いお言葉を頂戴して、偖一

同の者を引き取らせ、それより豫て用意せる清酒を暖めさせて晝餉の仕度を運ぶやう吩付けた。

この間上人は隨身の各上足方を促して、名香薫ずる床の間の佛壇に對つて暫く法味を捧げられ、厚く實長一家の菩提を弔ふて、その不思議な信施を感謝せられた。

＊　＊　＊

抑々實長は甲斐源氏新羅三郎義光五代の孫であつて、代々波木井の鄉に祿を食んでゐた。正嘉年中鎌倉に仕へてその道すがら、折節琵琶の小路に上人の說法を聽聞し、耳を重ぬる毎に本化の圓信漸く內に熟して、追慕の情禁ずる能はず、終に荏原義宗に憑つて始めて上人を松葉ヶ谷の庵室に訪問し、以後永く師檀の契を結んで無二の大檀那となつたのである。

後上人の具さに勸持の經文を色讀して、最後佐渡ヶ島より鎌倉に歸らるゝや、平左衞門尉は上人を俟つこと前年の比にあらず、頗る色を和げて折伏廢止の條件と共に城西に愛染堂を建立し、更に莊田一千町歩を寄進して、天下安泰の祈禱を請はんことを申し出た、然るに上人は辭色を激まして言下に之を退け、最後第三回の諫言を試みて終に館を退出し、古より三諫用ひられざれば卽ち去るてふ賢聖の古徹に鑑みて愈々嘉遯の意を決せられ、密かに隱築の地を擇ばれたのである。この時諸檀那はそれ〴〵上人を懇請して敬侍せんことを思ひ、池上荏原の人々は武藏の國、伊東の一族は伊豆の國、富木太田曾谷等の一門は下總の國へと、各々自國へ上人をお迎え申そうとしたが、上人は唯だ「かた〴〵存ずる旨あり」とて、終に實長の請を容れて鎌倉の弘通をば門下に托し、御身には一裝一笠僅かに日興以下の人々を隨へて、白雲悠々たる甲地に跡を斷たれたのである。

＊　＊　＊

一夜は積る四方八方の話に明けてその翌日、實長は庵室の地を相するため、上人及び上足方を案内して邸宅の後方に當る山路に分け上つた、道は一條の深い谷間續き、左右には大山重疊して高く天空を劃り、足下には刑棘路を塞ひで時に衣を裂き、霧立ち白雲迷ふ間を絶えず山鳥の喚び交はす聲、猿猴の叫ぶ聲など聞きつゝ更に歩を進むる程に、軈て七八丁も來たかと思はるる頃、道は漸く同じ谷間に介在する掌ばかりの平らな土地に開ひてゐた。

實長は徐ろに歩を止めて上人を顧みつ

「折角幽邃なる場所をとの御所望なれば、實長先ひつ日より色々と處々方々を尋ね合せしも、かいくれ良き場所柄も見當らず、誠に不本意とは存じながら、やう〳〵此地を見立て置きましたる次第、御師には御意如何に思召されませう」

と氣煩はしげにそのお顔をさし覗ひた。

紅塵うづ高き鎌倉の大路小路とは事變つて、これは又太古の景色にも似たる神仙の境、上人は御滿足なるお顔に笑みを堪へて

「日蓮が晩年を送るには如何にも屈强の場所、何條不足などのあり申さん、御配慮の程忝ふ思ひまする」

と思ひしよりは御滿足の體、實長も漸く安心して、それよりは彼方此方に歩を移しながら、或は臺礎の位置、又は水の利日光の具合、偖は通路の樣など一々精しく聞え上げて後、軈て一同を促して、再び道の邊の荆を掃ひつゝ、元と來た道を引き返した。

その夜實長は一枚の立派な製圖を認めて上人の御居間に伺候し、御庵室の構造につひて色々と申上ぐるところあつたが、上人は强ひてそれを打ち消しながら、

「御芳志の程は難有けれど、日蓮最早や老境に入りし身の上、そのやうな高雅な建物は欲しませぬ。唯だ膝を容るゝに足るさへあれば、充分滿足に思ひまする」

とたつての御辭退、實長も無據終にその意に從つて、一と先づ假りの御庵室を建立すべく決心した。

初夏の青葉に薫る月の座敷に、一家の人々を集めて毎夜の御說法も暫くの間見合せて、上人はこの程近き小室と云へる處に、慧長法印善智といふ才學の修驗者ある由を聞かせられ、近在を遊化がてら彼とも法門を交へたく、或日日興日向の兩人を召し連れ立ちて、庵室の出來上るまでを機に門を出られた。

實長はこの間、三上長富、福士長忠、橘光朝等の一族のもの、及び番匠四五の人々を督して、毎日庵室の建立に急がはしく、先づ木を切り荆を開ひて土を平し、深山より手頃の杜木を切り集めてこれを削らしめ、石を築き水を盛

り、板を打ち付け壁を塗り上げ、茅を束ねて奇麗に屋根をも葺き揃へ、玆に大略の骨組を終つて更に又細心なる注意の下に室内を取り付け、佛壇を初め調度の類に至るまで悉く之を整へ、剩へ色々と工夫して庭の風趣など添へて只管上人のお歸りを俟つてゐた。

小室より石和、北原、金川原と段々錫を進めて日野に至り、日野より終に信州諏訪郡蔦木まで遊化せられた上人は、思はず日數を重ねて此處より錫を返し、歸路甘理を過ぎて二十日餘りに漸く波木井に歸つて來られた。

喜び迎ふる實長に導かれて、上人はその翌る日の朝、再び彼の谷間に上り行くに、前日の荆棘雜木は跡もなく奇麗に薙ぎ取られて、その中央の平された新しい土の上に一つの瀟洒なる草堂が建てられてある。見れば三間四面の杜は僅かに十二本なれど、茅もて葺ける軒ふかく、奥まりたる中央には須彌壇をしつらへて本尊を安置し、留守を預かれる弟子等の心盡しかその前には

香華清らかに燈明さへ點ぜられ、南に綱代の日蔭を覆ふて書讀む窓を切り、その下に物書くべき机を設けて筆墨を戴せ、北の庇には香厨を添へて側らに夜具など藏むべき戸棚も營まれてある。庭を見れば眞柴を垣に結ひ巡らしてその中に樣々の藥草を植え、その外手鞠撫子千日紅など、何くれとなく時の草花を多く植え並べて、見るから好ましそうな住居であつた。

上人は心から實長の心盡しを感謝して

「色々御親切なるお取り儆し、日蓮何ともお禮の申しやうも御座りませぬ。お心盡しの程は、唯だ〳〵釋迦佛にお任せ申すことで御座りませう」

と云へば實長も湧きくる嬉さに目さへ濡らして

「勿體ないそのお言葉、實長却つて冥加も盡きまする。」と聲を呑み「折角のお入山を俟つにこのやうなる草堂にお迎え申しますること、誠に本意ない業に覺えまするが、何卒御海容の程偏へに願はしう存じまする」

と自分の不德を耻ぢ詫びた。

かくて上人は六月十七日、愈々この草堂に移られてよりは、毎日實長が貢ぐ供養に何不足なく、日與以下の人々を對手として、朝たには疾くより起き出でゝ日天子に法味を捧げ、それより香華燈明を新にして佛前に端座し、ゆるやかなるお經の聲に世の俗塵を忘るゝことや、暫時、日中よりは弟子等を始め集ひ來る實長一族のために一乘の妙理を談じて法益を頒ち、夕景には一座の衆會と共に題目の修行に餘念なく、夜は殊更に觀念の床に、一念三千の妙境を觀じて但見妙事の夢を結び給ふなど、宛然常寂光土の本地に住つて只管妙法蓮華の三昧に入られてゐた。

身に學德の譽はなくとも、一心決定せる久本坊は、自ら身を阿私仙に仕へし奴僕に擬して、毎日峯に土つては薪を採り、溪川に下つては水を汲み、その外炊事をいとなみ溫浴をすゝめ、朝に花を摘んで夕に燈火を點じ、席を淸

新晋碎身九年の春公

め庭を掃ひ、具さに佛門の八役を勤めて少しも己を惜む心なく、よく上人に仕へ奉つて無有懈倦の誠を勵んでゐた。

徒らに檀越を惱ますことを欲せぬ御師の御心を慮つては、日興以下の弟子方も亦修行の暇を都合して、久本坊、熊王四郎など丶共に、手ら鍬を採り鋤を擔つて畑を發し、種々の疏菜を培つて幾分供養の助けをされてゐた。けれども實長は疾くに之を察して恐懼の情に堪えず、燠寒の供物一切これを上人に知らしめずして、尙も朝に貢ぎ夕に送つてゐた。

或日のこと、實長は吉祥の晨を擇んで上人を訪ひ、色々法談の末草堂の牓名を願つたところ、上人は快く之を容れて直に香を燒き咒を持じて後、一枚の白紙に「身延山久遠寺」と大書して之を實長に授けられた。實長喜びにたえず、其夜大に賀筵を張つて酒を暖め、出來得る限りの供養を調へて一會を賑かにした。

身延の嶽に紅葉して、七面山の頂に雪を見初むれば、世はいつしか新玉の春を迎えて、幾程もなく又鷹取の山に蕨を見る。上人は移りゆく四方の景色をいと面白く觀じながら、或日筆を起して自らその生活を描寫された。

「誠に身延の栖はちはやふる神も惠みを垂れ天下りましますらん。心なきしづの男しづの女までも心を留ぬべし。哀を催す秋の暮には草の庵に露深く、檐にすだくさが丶にの絲玉を連ぬき、紅葉いつしか色深ふして、たえ〳〵に傳ふ懸樋の水に影を移せは、名にしあふ龍田川の水上もかくやと疑はれぬ。又後ろには峨々たる深山そびへて梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば庵の内には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峯を我朝此砌に移し置きぬ。霧立ち嵐はげしき折々も山に入つて薪